

SWEDEN

2024年度

現代福祉学部海外研修

報告書



目次

団長・副団長挨拶.....	2
個人報告	3
グループ報告	
スウェーデンの文化・概要（Svensk kultur och översikt）	35
ティーレソ・コミュニケーション（Tyresö kommun）	38
ヴァッテンユーレット・プレスクール（Förskolan Vattenhjulet）	40
第2のエコシティ　ロイヤルシーポート地区（Stockholm Royal Seaport）	42
スタートアップ支援（Stockholm Business Region AB）	45
若い心理療法士の働くクリニック(Barn-och Ungdomspsykiatri-BUP)	47
カロリンスカ大学病院小児病棟(Astrid Lindgrens Children's Hospital)	49
ハズビーガルスコーラン（Husbygårdsskolan）	51
ストックホルム大学　学生交流	53
教員挨拶	54
アルバム	58

団長・副団長挨拶

2024 年度 海外研修団長

吉川瞭子

副団長

秋庭夕葵

今年度の海外研修団長、副団長を務めさせていただきました、吉川と秋庭です。私たち 30 名の研修生は事前学習とガイダンスを経て、移動日を含めると 8 月 31 日から 9 月 8 日の 9 日間、海外研修に参加しました。昨年度は変則的に A 団、B 団と 2 団に別れての開催でしたが、今年度からは例年通り、1 団 30 名で研修に参加しました。また、本来であれば 2 年生のみが参加できる海外研修でしたが、今回も昨年度と同様に我々 3 年生、4 年生も合同で研修を行いました。この報告書を通じて、私たちが実際に感じたことや海外研修の様子について、伝えられたらと思います。

私たちはスウェーデン渡航の約 3 か月前から、事前学習に取り組みました。「歴史・文化・風土・社会政策」「地域開発」「福祉政策」「障害者教育・雇用」「育児・教育施策」「心理職の活躍」といった興味のある 6 つのテーマに分かれ、個人・グループ調べを進めました。最終的には各グループが全体に向けてプレゼンテーションを行い、参加者全員がスウェーデンと日本の差異や現地視察で学びたい点を整理した上で研修を迎えることができたと思います。そして、旅行代理店の方々、現地でお世話になるエミルさんから事前に渡航するにあたって、必要事項に関するお話をしていただき、初めて訪れる地でありながらも大きなトラブルが起きることもなく安心して過ごすことができました。

現地での 9 日間は日常とはかけ離れた異文化を体験する毎日で、大変有意義なものとなりました。長時間のフライトや現地での慣れない地下鉄移動等で疲れが見えることもありましたが、様々な地域や施設を訪れた中でスウェーデンの制度・情勢や専門職の働き方、現地の方の生活文化までを詳しく学んだ貴重な研修となりました。高水準の社会保障制度を確立し、福祉職や心理職の方々が多く活躍するスウェーデンは、やはり福祉大国と呼ばれるだけあって、充実した社会政策が実施されていることを実感することが多かったです。また日本と同じような社会課題に対しても、対応の仕方や価値観、考え方が異なることが分かりました。現地での視察を通じて、現代福祉学部の 3 分野である「福祉」「地域」「心理」の領域を網羅的に学ぶことができたので、帰国後の事後学習に活かすことのできる幅広い知識や疑問点を得られました。是非今回の学びを普段の大学での学習にも繋げていきたいです。

最後に、この研修を何事もなく無事に終えることができたのは、引率をしてくださった岩田先生、山本先生、現代福祉学部の事務員の方々、旅行代理店の皆様、そして何より、現地でガイド兼通訳をしてくださったエミルさんのサポートのおかげです。この場をお借りして研修生一同、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

福祉大国ならではの価値観

吉川瞭子

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

毎年恒例の現代福祉学部プログラムは、海外に語学留学ではなく、「福祉」を学びに行くことができる貴重な機会であり、私も卒業前に参加することができ、有意義な体験をさせていただいた。福祉を学んでいれば一度は、スウェーデンを始めとした北欧諸国の福祉政策について知ることがあると思う。だが、今まで私は映像や文献だけで諸国の様子を学んでいたため、渡航前はぼんやりとした雰囲気しかイメージが湧かなかった。現地では、多様な施設の視察は勿論、市内観光、ストックホルム大学との学生交流、異文化体験等は通じてスウェーデンで浸透している考え方、文化を日本と比較しながら見ることで、イメージだけではない視覚的に明確な情報を得ることができた。滞在中はなるべく偏見や先入観を取り除き、フラットな見方ができるように心掛けた。よって、異文化理解に努めることにより、自己覚知の訓練という学びに繋がったと思う。

2. 特に印象に残っているエピソード

毎日視察先に訪問する度に、「Fika（フィーカ）」と呼ばれるコーヒーや紅茶を飲んだり、甘いものを食べたりする時間があつた。日本ではこのような文化がある職場は珍しいため、とても新鮮だった。スウェーデンの職場は一日に何度もこのフィーカの時間を確保するようで、忙しい中でも一息つき、同僚としっかりとコミュニケーションを取るための工夫がなされていると感じた。また、ある公務員の方がコロナ禍以降もテレワークを多く活用していると話されていて、ワークライフバランス実現のための意識が個人それぞれに備わっている点は日本の働き方改革においても良い参考になると思った。

3. 今後に向けて

スウェーデンは社会民主主義レジームの代表国として、すべての人に社会保障が行き届くような政策が国家、自治体とともに推し進められてきた。

しかし、これまで多くの移民を受け入れてきた国でもあるため、人口の約2割が外国人である。その中には、在留外国人の他、難民やその家族も多く含まれることから公的な支援を受けることができない人々が街中で増えていることも明らかだ。私たちが帰国した直後の9月末には、政府が、「自主帰国を決めた移民に対し、1人当たり最大35万クロナ（約490万円）を給付する新制度」を発表した。日本は移民・難民に関して厳しい対応をし続けてきたが、様々な業種における人手不足の状況を考えると、日本も他人事ではない課題である。

福祉大国として幅広い支援で充実している側面は参考にしつつも、先にスウェーデンで表面化している問題にも注視しながら、さらに学びを深めていきたい。

海外研修を通して

大橋 満桜音

1.海外研修全体を通しての感想や学び

スウェーデンに行くまで、初の海外っていう事もありとても不安だったが、到着してみたらその町並みの美しさや楽しそうな人々の様子に不安も薄れていった。特に心配していた事が、食事についてだった。しかし、スウェーデンの食べ物はとてもおいしく、毎食何がでるのか、どんな伝統や特有の文化があるのかを楽しみにしながらいただいていた。

私は児童福祉に興味があり、研修に申し込んだ理由もスウェーデンの児童福祉について学びたいと思ったからである。学びとして、スウェーデンでは幼少期の体験をととても大切にしていることが分かった。例えば、プレスクールでは自然の中で身体を動かす活動を行っていたり、本物に近いおもちゃなどの道具が使われていたりした。幼少期に多くの物事に触れることでいろいろなものに興味を持ち、視野が広がったり考える力が身についたりという良い影響が見られることを学んだ。

2.特に印象に残っているエピソード

自由時間の時に、友達と三人でショッピングをしていたらおばあさんが「素敵なワンピースね」と私たちに声をかけてくださったことがとても心に残っている。なかなか日本では、たとえ衣服が素敵だと思っても声をかける事は少ない。そのため、声をかけてくださったことにとても驚いた。また、私たちの反応や話していた言語から日本人だと分かったのか、「日本人？」と聞いてくださり、そこから日本の好きなところを何個か教えてくださった。他人とのコミュニケーションが日本に比べて積極的ではあるが嫌にはならないナチュラルなものであることへの感動と、日本がスウェーデンにも愛されていることが分かったことで、胸がとても温かい気持ちでいっぱいになった。

3.今後に向けて

スウェーデンでたくさんの学びを得たことによって、自分はそもそも日本の福祉の現状の知識が曖昧であるという課題が見えてきた。特に児童福祉について研修前に比べて学びの意欲がわいてきた。今後はスウェーデンで得た知識や視野に加えて日本についても考えていきたい。

海外研修を終えて

高橋舞

1.海外研修全体を通しての感想や学び

海外研修全体を通しての感動や学び私は佐野ゼミに所属しており、昨年度はベトナム・タイ・ネパールの各福祉施設を訪問した為、福祉的に遅れている国に対する知識はあっても、発展している国に対しての知識が全くなかった。よって、その違いについて自分の目で見て知りたいと考えたことこそが、この海外研修に参加を決めた理由だった。

この海外研修において最も驚いたのは、交通インフラが今まで見た国と比にならない程に整っている点である。私の今まで見てきた国は車いすでの移動すら困難な道路がほとんどだった。(下のネパール首都内の道路である。)しかしスウェーデンでは、車いすで町を動くことは勿論、階段を上り下りでき、段差も殆ど無かった。このような障がい者が一人で生きることを可能とする取り組みを始めて知り、私は強く感動した。また、私は事前学習でLSS法について調べていた。

この法の目標は「障がい者各個人が他の人々と同じように生活できるようにすること」である。この目標達成は容易では無いと、実際にスウェーデンへ行く前は考えていた。しかしながら、町全体が障がい者のフォローをしているようなまちづくりを自分の目で見て、何故この国がこのような目標を立てているのか少し理解できたような気がした。

2.特に印象に残っているエピソード

特に印象に残っているエピソード現地学生との交流である。私は今まで、こんなにも日本について学びたいと思っている海外の人に出会ったことがなかった。その為、熱心に日本語を学び、文化を知ろうとする学生たちに出会い嬉しく感じた。特に、好きなアニメについて英語で語り合った経験は、滅多に得られない時間だと感じとても印象に残っている。

3.今後に向けて

私はスウェーデンから帰った2か月後、フィリピンの福祉施設を訪問した。そこで見た光景は当然、研修で見た景色と異なっていた。私はこのような地域差を知ることに対して強い好奇心がある。よって今後も福祉的に発展している国していない国間問わず様々な国を訪問し、私と海を挟んだ場所に住まう人々の暮らしについて自分の足を運び、学びたいと考えている。



海外研修を終えて

等々力あかり

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

私にとって初めての海外が今回の研修であった。初の海外ということもありスウェーデンに着くまで不安でしかなかったが、最終日には日本に帰るのが寂しいとさえ思えるほど充実した日々を過ごすことができた。色とりどりの街並みや住宅街の中の自然の多さ、食事の文化、現地の人々など見るもの全てが印象的だった。特にスウェーデンに暮らす人々が印象的にであった。東京などの都心部では多くの方が何かに追われているのかと感じるほど急いでいるという印象がある。しかしスウェーデンの中心部やそれ以外の街中、研修訪問先で出会う方のほとんどが心にゆとりを持っている印象を受けた。この印象の違いがどこから生まれるのか、約一週間の海外研修を通して考えた結果、社会制度の充実性や健康志向の方が多くことが要因の一つではないかと感じた。お話を伺った現地の方の多くがウォーキングやスポーツなどを日常的に行っているとおっしゃっていたり、ほとんどの住宅から行きやすいところに、公園など体を動かせる場所が整備されていたりなどのお話を聞いた。このことから、外に出て体を動かすことで身も心も健康な方が多いのではないかという結論に至った。この気づきを含め、実際に現地を訪れることでしか感じ取ることのできなかった経験が多くあった。参加して本当に良かったと思えるほど充実した海外研修であった。

2. 特に印象に残っているエピソード

私が今回の海外研修において印象に残っているエピソードは自分の言葉で現地の人に思っていることを伝えることができたことだ。私は余り英語が得意ではなく外国の方と会話をした経験もほとんど無い。そのため今回の海外研修で特に不安だった要素が言語についての面であった。現地ではほとんどの時間をガイドの方とともに行動したのであまり自分で話すという機会はなかったのだが、現地の大学生との交流の中で話す機会があった。その中でも印象に残っているのが現地の大学生との交流の場面である。現地の大学生との交流会では4人がけのテーブルに現地の大学生と日本の大学生の二人ずつが分かれて席に着いたのだが、その場面ではガイドさんがいるわけではないため自分の言葉で相手に伝えなければいけなかった。自分の思っていることを全て伝えることができたわけではないが、相手に思っていることが伝わったときのうれしさや楽しさを実感することができた。

3. 今後に向けて

今回の海外研修を通して、多くの貴重な経験を積むことができた。また、今まではあまり海外に行くことに前向きではなかったが、スウェーデンに限らず他の海外へも足を運んで自分の知見を広げたいと感じるようになった。

スウェーデン個人報告

中野梓

1.海外研修全体を通しての感想や学び

皆さんは福祉先進国スウェーデンと聞いて何を思い浮かべるだろうか。失業率の低さ、社会的弱者に対する援助、医療サービスなどのアクセスのしやすさ、さまざまなことがあるだろう。筆者もスウェーデンに行く前はこれを読んでいる君たちが考えていたようなことを考えていた。しかし、いざ現地に赴いてみると新たな発見がある。それは『噛みタバコ』だ。噛みタバコとは、タバコの葉などが入った小さな袋を口腔内の歯茎と唇に挟み、唾液により溶け出したニコチンを摂取するものだ。火を使わず煙も出ないため、機内や教室などのいわゆる喫煙不可の場所でもニコチン摂取が可能な代物である。実はこの噛みタバコ、スウェーデン発祥なのである。筆者は紙タバコ、加熱式タバコは嗜んだことはあるが噛みタバコに出会うのは初めてであったため、噛みタバコ発祥の地にいるならば喫しないわけにはいかないだろうと思い噛みタバコを喫煙ならぬ喫ニコチン（正しい表現が何かわからないがご愛嬌ということで）してみた。口腔内に入れた瞬間は特に何も感じなかった。少し経ったあと唾液が分泌され、それに溶けたニコチンのせいなのか口内にピリピリとした刺激が襲ってきた。その唾液を飲み込むと喉や食道にも同じような刺激が感じられた。おもしろい。

2.特に印象に残っているエピソード

噛みタバコの体験が終了した後、ふと疑問に思ったことがある。（上記の見出しは話の内容と関係ないので無視してほしい）これは喫煙に含まれるのだろうか。スウェーデンは世界的にみても喫煙率の低い国だ。しかし、その喫煙率の中の噛みタバコ使用者は含まれているのだろうか。喫“煙”ではないため含まれないのだろうか。もちろん噛みタバコもニコチンや発がん性物質を含んでいるため、使用することによってがんになる確率は増加する（肺には入れないため肺がんのリスクはゼロに近いそうだが口腔内に留めておくため口腔がんのリスクは高いそう）。そうならば、喫煙ではなくとも喫煙率の中に噛みタバコ使用者を入れるべきではなかろうか。筆者はこのことに関して興味はあるが論文を読んで研究するほどの熱意はない。もし読者の中に興味があり、調べてみたい人がいれば是非研究をしてほしい。

3.今後に向けて

スウェーデン研修を経て自分の中で大きく変わったことはないが、大学の海外研修という制度をうまく活用して行けたことに関しては非常に良かった。これを読んでいる読者の方もスウェーデンのみならず実際に現地に赴き大学で座学を受けているだけでは永遠に発見することのできない思いがけない出会いを探してほしい。

海外研修を終えて

秋庭夕葵

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

今回海外研修に参加する事ができ、とても有意義な時間を過ごす事ができた。単に旅行に行くだけでは経験できない、その国の人々が実際に使っている機関や施設の見学や、国の仕組みを知る事ができ、日本と比較できた為、とてもいい経験になった。特に印象に残ったのがスウェーデン人の人柄で、勝手にスウェーデンの人もアメリカのように誰にでもフランクな感じなのかなと想像していたが、実際は他人にはむやみに話しかけないという人が多く、プレスクールで子ども達を見た時も、誰にでも笑顔で手を振るというわけではなく、少し人見知りをしている感じだったので、そこは少し意外であった。

2. 印象に残っているエピソード

私が印象に残っていることは2つある。1つ目は、ストックホルム大学の学生と交流を行ったことである。交流したのが日本語を学んでいる学生ということもあり、日本の文化にとっても興味を示しており話が盛り上がった。特に折り紙を一緒に折り、お互いにプレゼントし合った事が印象的だった。また何人かがクライミングを趣味としてやっているという話を聞き、私自身もクライミングをやっていた事もあり、スウェーデンでクライミングが人気であるという事を知れて嬉しかった。2つ目はザリガニを食べたことである。昨年度は交流会でザリガニが出たという話を聞いて楽しみにしていたが、今年度はなかったため、次の日に自分たちでザリガニを食べにお店に行った。そのお店では、ザリガニの他にもエビ、カニ、ロブスターを頼んで一緒に食べた。ザリガニはエビに似ていたが、エビよりは少し臭みを感じた。しかし食べることに意味がある為、とてもいい経験になった。

3. 今後に向けて

海外研修を通して、また一つ知見が広がったと感じた。元々色々な国に赴き、その価値観に触れることが好きであり、今回このような素敵な機会にスウェーデンを訪問でき、自身が学んでいる福祉、心理分野の施設に訪問できたことがとても良い経験になった。国民全員が暮らしやすいと思っているのかというところは疑問に思ったが、日本では制度を作るだけで讃えられることを、スウェーデンは当たり前に染み付いて行っているという印象だった。ただ都心を見ているだけで、地方の病院が都心と同じように機能しているかというのはまた別である気がしたので、もし機会があればスウェーデンの田舎の方に行き、そのような調査もしたいとも考える。これからも向上心を忘れずに、日本以外の国がどのような制度をつくり、国民が暮らしやすいように工夫をしているのか、実際に現地に行き調べていきたいと考えた。

海外研修を終えて

加藤玲菜

1.海外研修全体を通しての感想や学び

海外研修を通して、文化の違いを感じる共に福祉に対しての考え方の違いも学んだ。文化の違いと考え方、価値観の違いは相互に作用しているとも思うが、全く環境の異なった場所での福祉は何歩も先に進んでいるように感じた。プレスクールを視察した際に父親のお迎えが多いと思った。それは働きやすい環境と充実した教育環境があつてこそだと考えた。教育の中で豊かな思考の形成がなされていて、職場や学校等、より福祉が身近にある国だと思った。

2.特に印象に残っているエピソード

福祉や教育といった面で印象に残る学びがあつたのはもちろんだが、私はスウェーデンの文化が印象に残っている。クッキーやシナモンロール等の甘いものを食べたりコーヒー、紅茶を飲みながら家族や仕事仲間と喋る時間のことをフィーカという。どの視察先でもフィーカの時間が設けられ、落ち着いた雰囲気で見学することができた。このような時間が日常的にあることで周りとの親交を深めると共に豊かなアイデアを生み出すことに繋がると考えた。また、フィーカで休憩時間を確保することで仕事の効率が上がり、労働環境や日常生活が向上すると思った。

3.今後に向けて

今回の研修で自分の英語力の未熟さを実感した。今まで、ネイティブの人と話す機会が少なかったため、英語で会話することに躊躇しがちであった。自分の言いたいことを英語で言うことは難しかったが、自由行動の時間に訪れたお店の方々は私の拙い英語を理解しようとしてくれた。なんとか言いたいことが伝わった時は本当に嬉しく感じた。この経験を経て、英語の勉強への意欲に繋がった。今後も勉強を続けていきたいと思ったし、次に海外へ行く時にはよりスムーズな会話ができるようになりたいと思う。

また、今後の学びで困った時や行き詰まった時にはスウェーデンでの経験を思い出し、比較することで次に繋げていきたい。

今回の海外研修で日本とは違う考え方があることを知った。だからこそ、一つの考えに捉われずに視野を広げ、多面的な考え方をしていこうと思う。

海外研修を終えて

笹山富士子

1.海外研修全体を通しての感想や学び

今回の海外研修は私にとって初めての海外を訪れる経験であり、とても新鮮な経験となった。この研修を通して、大きく分けて学問としての学びと個人的な学びの2つを得ることができたように思う。まず、学問としての学びは、やはりスウェーデンが福祉大国ということもあり、福祉的な学びがとても多かった。国全体が福祉に対する意識が高く、マイノリティを前提としたまちづくりや制度づくりが行われている印象を受けた。またそれぞれの機関が他の多くの機関と連携しながら、事業を行っているようだった。学校では警察や役所などの国の機関と連携したり、ソーシャルワーカーと協力することでソーシャル的支援と教育のバランスを大切にしている。精神病院においても患者の学校や役所と連携していたりと、横のつながりを大切にしているという印象を受けた。個人的な学びとしては、互いを「人間」としてみることの重要性である。スウェーデンで出会った人々は、大人だとか子どもだとか、障害があるかないかとか、そういったカテゴリーされた価値観で相手と接するのではなく、いち「人間」として接しながらコミュニケーションや交流を楽しんでいるような気がした。個人のことを尊重したそういった接し方は自分も真似したいなと思った。

2.特に印象に残っているエピソード

小学校を訪問した際に、小学生が私達の緊張を吹き飛ばすかのようにフレンドリーに接してくれたことが今でも鮮明に覚えている。国籍も言葉も違う中で、どうやって子供たちとうまくコミュニケーションをとろうかと不安になっていた私だったが、そんなことなど気にせずに子どもたちが私達にたくさん質問をしてくれたり、一緒に遊んだりして、国籍や言葉など、この子供たちの中では何も関係ないのだろうなということを感じ、印象にとっても残った。

3.今後に向けて

今回の海外研修は、学問的な学びもそうですが、自分の価値観を変えてくれたり、生き方そのものに良い影響を与えてくれるもとであった。学問的に得ることのできた学びは、今後の大学での学びや実習などで活かしていくことができたと思う。スウェーデンで過ごし、スウェーデンの良さはもちろんだけれど、改めて日本の良さにも気づくことができたと思う。より今後の自分の人生に深みがでるととても良い経験に海外研修がなったと感じている。

海外研修を終えて

塚原 浩輔

1.海外研修全体を通しての感想や学び

私は、時間がある大学生のうちに一度は海外に行って海外の文化や言語に触れてみたいと考えていた。そんな中で、現代福祉学部の海外研修の存在を知り、参加することにした。

実際にスウェーデンを訪問してみると、街の雰囲気や生活している人の雰囲気から、日本との違いに着目するようになった。そして実際に視察先を訪問すると、働く環境が日本とは全く違うことに気づいた。スウェーデン人の多くは家族を大切にしていって、夕食の時間になったら仕事を終わらせて帰ることが多い、またフィーカという、紅茶やコーヒーとちょっとしたお菓子を食べながらコミュニケーションを取る文化があり、和やかな雰囲気で会議が行われていた。このように日本のような堅い形式にとらわれずに、人間らしくフレキシブルに働いている様子を見ることができた。

2.特に印象に残っているエピソード

スウェーデンを訪問する中で特に印象に残ったことは、小学校を訪問した時に、小学生のみんなと一緒にサッカーをしたことだ。初めはいろんな国の子どもたちが国籍を気にせず、同じ空間で遊んでいる姿を見て、“区別”をしない子どもは良いなと思いながら見とれていた。その後子どもたちがサッカーの試合に誘ってくれて参加することにした。試合中、日本のことについて質問されたが、所々コミュニケーションが上手くいかないことがあった。それでも諦めず、簡単な英語に言い換え、ジェスチャーを用いることでなんとか伝えることができた。相手の話していることが分かり、そして自分の伝えたいことが伝わることの嬉しさを身をもって感じることでとても嬉しかった。このように困難なことに直面する機会や挑戦したりする機会を経験することによって、小学生との交流を単なる交流に留めず、自己成長の場にすることができ、良かったと思う。

3.今後に向けて

今回の研修に参加したことで、日本とは全く違った文化、考え、視点をもつことができ、物事に対する自分の視野・視点を広げることが出来た。その中で、日本でも取り入れることができるものについては日本に合う形に調整した上で、積極的に取り入れようと検討していくことが大切だと感じた。また、個人的にはもっともっと英語を勉強して、多くの外国人と積極的にコミュニケーションが取れるまでスキルを伸ばしていきたいと思った。そしてまた、海外へ行き、色々な国の言語、文化を学んでいきたい。

海外研修を終えて

西谷まりな

1.海外研修全体を通しての感想や学び

1日に何度もFIKAと呼ばれるコーヒープレイクの時間があることを知り、家族や同僚、パートナーとの自然なコミュニケーションを大切にしている文化を肌で感じた。仕事とプライベートを完全に分けて過ごしているのではなく、統合して上手くバランスを取っているように見える。働き方に関して日本とワークライフバランスの感覚が異なると思った。私は一つのことに没頭して考えが煮詰まり作業が止まってしまうことがよくあるので、自分の気持ちをリフレッシュできるFIKAのような時間を個人的に作りたい。また、どの施設に訪問しても職員の方々は生き生きと働いていらしかった。誇りを持って仕事に打ち込む姿や、人にために一生懸命働く大人は国を問わず改めてかっこいいと思った。

2.特に印象に残っているエピソード

実際にスウェーデンに来るまでは、福祉国家のイメージをたくさんしていた。しかし、研修中に友人と食べに行ったレストランで衝撃的な出来事があった。店内でタコスを食べっていると、隣のテーブルにいたおじいさんに話しかけられた。地元の人が私たちに興味を持って話しかけてくださったのだ。「私たちがなぜスウェーデンに来たのか」、「何を勉強しているのか」などを聞かれたので、日本の大学で社会福祉を学んでおりスウェーデンの先進的な福祉制度や教育を視察しに来たことを伝えた。そのときに「スウェーデンの福祉が素晴らしいの？何を言っているのだ。早く日本に帰りなさい。」というような言葉を返されたのだ。私はこの言葉がどうしても忘れられない。残念ながらおじいさんがどうしてそう思うのか深く聞き返すことはできなかったが、福祉国家と謳われる国であっても全ての国民が満足な生活を送っているわけではないことを感じた。これからも学業を励む中で、様々な人の立場になって物事を考えるように心がけたい。

3.今後に向けて

スウェーデンという国が大好きになった研修期間だった。実際に自分の目で現場を見て社会福祉を学べる貴重な機会であり、学ぶ意欲が絶えず積極的に質問や交流ができた。社会福祉とは、「すべての人が心身ともに健やかに、人間らしい生活を送れるように支えるためのもの」と言うことを今回海外で強く感じ、日本でも今後さらに深く学んでいきたいと思う。

海外研修を終えて

松浦ゆら

1.海外研修全体を通しての感想や学び

2024年8月31日から9月7日まで、日々新しい発見や気づきの連続で、充実した海外研修期間を過ごすことができた。またそれと同時に、私にとって初めてのヨーロッパであるスウェーデンで過ごしたこの期間は、自分にとっての大きな思い出となった。私は将来の夢が教員であることもあり、教育や子どもの福祉についての理解を、自分の中で深めることができた。スウェーデンの教育や子どもの福祉では、とにかく「子どもの意見を尊重する」ということが重要視されていたことが印象的だった。児童支援では、幼い子どもでも理解しやすいイラストを用いて意見を聞き、プレスクールや小学校などでも子どもの意見を聞いたカリキュラムやプロセスを組んでおり、自分の将来の夢に不可欠な学びを得ることができた。

2.特に印象に残っているエピソード

母が保育士で、普段から保育園での取り組みを聞いていることもあり、プレスクールでのお話が特に印象に残っている。そのなかでも、森が保育園の敷地内にあることに驚いた。スウェーデンの法律で森の中は、共有財産として自由に散策して良いことになっており、幼い頃から「自由に歩いて良い」＝「自を邪魔しない、壊さないという責任が伴っている」ということを学ぶようだ。森の中でもプレスクールの子どもたちは、決められたカリキュラムに縛られるのではなく、子どもたちの関心や興味、成長に合わせて変動させながら、色や形、自科学、算数などを横断的に学ぶことができる「プロセス」を先生たちが日々考え、学んでいる。大人が提示したものを受動的に学ぶのではなく、経験を通して、何を学んでいるのかは子どもたちが決めているということだ。さまざまな興味関心が目覚め、スポンジのように吸収していく3歳から小学校入学までという時期に、このような学びができるのはスウェーデンのプレスクールならではの点である。子どもたちの興味や関心に敏感に反応し、変化や成長を日々追ってプロセスを考えることは、先生にとって大きな責任と負担が伴うものであるが、これこそが本来、日本の保育士や幼稚園教諭にもなくてはならない能力だと感じた。

3.今後に向けて

こうしてスウェーデンでさまざまなことを実際に見て、聞いて学んだ。私は将来中学校の教員になりたいと思っている。きっかけは、級友の自殺、後輩の自殺、そして生徒同士の殺人といった事件が3年連続で自分の通う中学校で起こり、「自分が教員になって、この状況を変えなくては」と思ったことである。スウェーデンでの研修では、プレスクール、小学校、特別支援学級のある高校、小児病棟、精神科など、教員を目指すという自分の目標に不可欠な学びばかりであった。北欧の教育方法は世界中で参考にされており、どこまで日本の教育に落とし込んでいくかが議論されている。ここから私は、教職課程の授業で更に勉強を積み、4年次には教育実習が待っている。実際の教育現場に携わり、日本の教育をよく知った上で日本の教育の良さ、改善点を検討し、スウェーデンの教育の取り組みをどのように日本で活かし、日本の教育とどのように掛け合わせていくのか、改めて考えていきたい。

海外研修を通して

境悠菜

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

海外研修全体を通して、スウェーデンという国がいかに個を大切にしている国かということを知った。プレスクールへ訪問に行った際、「子供が何に興味があるかを大切にしている。」と仰っていた。以前はプロジェクトという形ではじめとおわりを作っていたが、いまではプロセスという形に変え、ずっと学び続けられる環境を作っているという。この話を聞いて、プレスクールというまだ小さな子供ではあるものの、それぞれの興味・関心がどこにあるのか、またそれをとことん追求できる環境を職員の方々が作っていることが素晴らしいと感じた。そのように幼少期から育てられたからなのかは、私には分からなかったが、大学に入る前に海外へ留学へ行ったり、好きなことをしたりする期間を設けている大学生が多かった。この自由さ、自分のやりたいことをやる、またはやれる環境が当たり前でずっとあり続けている部分が、日本とは違う意味での「自由さ」であると考えた。

2. 特に印象に残っているエピソード

私は今回人生で初めて海外へ行った。目に映る全てが新鮮で街中を歩くだけで楽しく、貴重な経験をさせていただいたと思っている。そんな中で特に印象に残っているエピソードは、スウェーデン大学の学生たちとの交流だ。まず驚いたことが日本の認知度である。片道 17 時間もかかるほど離れている国同士ということもあり、私たちはスウェーデンといえば IKEA くらいしか思い浮かばないものだが、スウェーデンの大学には日本語学科が存在し、アニメや漫画など多くの人が日本の文化を知ってくれていた。また、もう一つ驚いたことはコミュニケーション能力の高さだ。スウェーデンの学生と交流し、仲良くなるとそのまま遊びに行こうと誘ってくれた。私がもし逆の立場だったら同じことができたか考えると、なかなかできない気がする。スウェーデンの人々は日本人より社交的で、アクティブな方が多いのではないかと感じ、日本と同じように「おもてなし」の心が強い国なのではないかと感じた。

3. 今後に向けて

今回の研修を受けて、まだまだ自分の知っている世界は小さなもので、もっと広い世界を見てみたいと感じた。また、日本も不自由のない、比較的自由的な国だと思っていたが、もっと個人がやりたいことをやれる環境になれば、いいのではないかと考えた。そこで広がる世界や、得られる経験、出会う人との関係など、座学の勉強では学びきれないことが数多くあると実感した。そのため、私もできるだけ今しかできない挑戦や、やりたいことは思いっきりやろうと思った。

海外研修を終えて

向山彩音

1.海外研修全体を通しての感想や学び

私は1年生のときにこの海外研修のプログラムがあることを知ってから、ずっと行きたいと思っていた。大きなきっかけは、基礎ゼミの先生から昨年度に行った体験として、日本とスウェーデンでは福祉制度に限らず国の文化や人々にもさまざまな違いがあるということを聞き、私も実際に現地を経験したいと思ったからである。今まで海外には行ったことがなく、初めての体験ではあり、不安な点も多かったのだが、実際に行ってみるとまず街並みの綺麗さに圧倒された。どこを切り取っても絵になる街並みで、特にガムラスタンという旧市街地を散策した経験はとても印象的だった。

2.特に印象に残っているエピソード

さまざまな場所を訪れることができ、スウェーデンにおける体験はすべて貴重な体験であったが、その中でも特に印象に残っているのは、プレスクールや小中学校における子どもに対する教育に関することである。プレスクールでは、授業という形は無いものの普段の遊びから子どもの主体性に重きを置き、子どもたちの意志を尊重した形でプログラムを組んでいるという取り組みが行われていることを知った。例えば、普段の何気ない会話に出てきた虫に関する疑問を、ひとつの議題として取り上げ、その疑問解決に向けた実験や検証を子どもたちが主催として行うといったものである。日本では先生によって決められたことに取り組むことがほとんどなので、より積極的に取り組む姿勢・主体性を教育しているプレスクールの取り組みはとても印象的だった。また、小中学校では実際に英語の授業を見学させていただいて、日本の静かな授業とは異なる教室の雰囲気を目の当たりにした。先生が質問することに対して、ひとりひとりがきちんと自分の意見を持ち、積極的に発言していた。これは、先生側が生徒の意見に対して否定することを避けるなど、全ての生徒が発言しやすいような環境作りをしている工夫をしているとのことだった。日本においても、全ての生徒がより積極的に活動することができる環境作りが求められると実感した。

3.今後に向けて

今回の研修において、さまざまな研修先に行ったものの自分から積極的に質問することができなかったことが反省点である。質問するということは、自分の知識も十分に備わっていないといけないということを痛感した。自分のさらなる学びを深めるためにも質問することはとても大切である。この経験を通して、今後国内外に関わらずいろいろな人の話を聞く上で自分から積極的に接触してさらなる福祉に関する知識を深めていきたいと思った。

海外研修を終えて

吉富志織

1.海外研修全体を通しての感想や学び

私はスウェーデンの高福祉制度に以前から興味があり、入学初から研修に参加したいと思っていたため、実際に行くことで学びが深まり有意義な研修となった。スウェーデンに興味をもったきっかけは幸福度ランキングで上位だったことである。そこで、日本と何がどのように異なるのか、何が幸福度に繋がっているのかを見出すことを目的として研修に参加した。現地で感じた日本との大きな違いは「自由度」である。具体的には、残業がない、行政において女性が活躍している、勤務時の服装が自由、現地の学生のファッションやメイクが多様、子どもに合わせて病室を変えるなどである。どの訪問場所でも、このような自由さを感じ、それがたり前になっていて、皆いきいきと生活しているような人間らしさを感じた。

2.特に印象に残っているエピソード

福祉面ではもちろん学ぶことが多かったが、私はスウェーデン独自の「フィーカ」という文化が最も印象に残っている。これは、工作中や日常の中で菓子やコーヒー、紅茶をたしなむ時間が設けられるものである。実際に訪問先ではシナモンロールやぶどう、紅茶、コーヒー、サンドウィッチなどが用意してあった。最初は戸惑ったが、毎日経験することで最終日には楽しむことができた。この時間があることで仕事を長時間し続けることがないため、リフレッシュができて集中力が高まり、効率的になると私は考えた。オンとオフをしっかりと区切ることの大切さを学び、帰国後私も取り入れてみた。以前の、課題が終わるまで取り組み続けるやり方は飽きてしまうことが多く結局時間がかかってしまうことが多かったが、フィーカタイムを設けると、課題を再開したときにやる気が復活して結果的に時間が短縮することができている。スウェーデンの福祉制度を取り入れることはすぐには実現できないが、フィーカは今から取り入れることができるから、日本でも普及するべきだと感じた。

3.今後に向けて

今回の研修での反省点は、日本の福祉制度についての知識が少なく、事前学習が満足にできていなかった点である。現地で聞いたお話はどれも興味深く学ぶことが多かったが、日本の教育や行政、福祉における具体的な制度について詳しく理解していなかったために、比較がうまくできず、スウェーデンの優れた制度を理解するのが難しかった。しかし、研修中に学びが深められなくても帰国後大学で授業を受けていくうちに知識が増え、比較できたことが多くあり、研修期間だけでない長期的な学びを深めることができていることを実感した。今後も、日本の福祉制度について学び、定期的に比較することでスウェーデンの福祉制度の充実度について理解を深めていきたい。

沢山の刺激をもらったスウェーデン研修

海上紗慧

1.海外研修全体を通しての感想や学び

全体を通じて、私は3つのことを学んだ。1つ目は、スウェーデンでは1人1人の自立を重要視していることである。視察先では子ども・障がい者・高齢者、どの分野においても自立という言葉がキーワードとして現れた。それに関連して、スウェーデンでは教育制度が手厚いということが分かった。スウェーデンでは高校卒業後に1-2年、バイトや旅行を通じて自分の夢を探せる期間がある。こういった時間が若者を自立させる1つの手段になっているのではないかと考えたと同時に、日本でも取り入れて欲しいと思った。国としては、たとえどんなに時間がかかったとしても人々に自立を促すことで、その人がより自分に合った職場で働くことができたり、活躍できたりすることで、結果的に社会に還元してくれるということを期待しているのだと感じた。そうした国の寛容さは、日本でも見習うべきだと感じた。3つ目は、高齢者、障がい者に対しての福祉のあり方である。前者に対しては年齢ではなく、その人の必要性に応じて支援を展開していくあり方、障がい者の方に対しては、こちらが合わせていくといったあり方に深く共感を覚えた。一方、高齢者施設の不足や働き手不足・障がい者と健常者の壁については、日本と同様の課題があると感じた。

2.特に印象に残っているエピソード

自由研修の日に、父の知り合いとHotorget という若者の街を歩いていた際、多くの木々が立ち並ぶ通を通った。そのときにその方が「ここには昔、駅を建設するという計画があったが、若者達が木の上に乗って反対運動を起し続け、その計画は無くなった」と教えてくれた。他にもその街では、若者が何かスピーチをして、他の若者達がそれを聞いているという光景を目にした。日本においては、「空気を読む」という文化が根付いており、私たちは自分の意見を言おうと思ってもなかなか口に出せない。しかし、それでは楽しくない。自分が意見したところで何も変わらないと思うのではなく、言いたいことがあるときには素直に言ってみたいと思えた。

3.今後に向けて

初めてフィーカを体験させてもらったが、これは相手のことを知りたいときや、相手に歩み寄りたいときなどに有効であり、場が和んでから本題に入ることで、やりたいことや達成したいことも実現しやすいのではないかと考えた。

全ての人に自立を促し、人々の多様性を認めるスウェーデンという国が、私は大好きになった。スウェーデン研修で学んだことは今後、グローバルな視点でまちづくりや、福祉を捉えていく中で重要な材料となるだろう。忙しいと、ついつい休む時間を惜しんで動いてしまうが、そんなときはスウェーデンで過ごした日々を思い出しながら、フィーカをしようと思う。最後に、今回の海外研修でお世話になった全ての方々、背中を押してくれた両親に深く感謝を申し上げて、個人報告書を締めさせていただきたい。

海外研修を終えて

青木航

1.海外研修全体を通しての感想や学び

スウェーデンは美しい街並みと歴史的建造物が多く、ストックホルム市内は日本とは違い文化的な魅力に触れることが出来る良い経験であった。持続可能な生活様式が浸透しているスウェーデンのライフスタイルには感銘を受けた。リサイクルやエコな取り組みが日常生活の中で実践されていて、環境意識の高さは日本とは異なったものを感じることが出来た。自然と都市が良い感じに調和した場所になっていて、感動と新鮮な発見を得られる素晴らしい国だと思った。おいしい食事、特にフィーカ（コーヒーブレイクタイム）はスウェーデンならではの魅力だと感じた。

スウェーデンの税金制度は高福祉国家ということもあり高いのが特徴だと事前学習で学んだが、実際現地に行き物価の高さと税金の高さのダブルパンチにはとても驚いた。税収は医療や教育、社会福祉などの公共サービスに当てられており、国民全体の質向上に繋がっている感じ、持続可能な社会を支える重要な役割を果たしていると感じた。

2.特に印象に残っているエピソード

私が一番印象に残っているのはストックホルム大学の日本語を学んでいる学生と交流したことだ。自分にとってそのような経験がなかったので片言な英語と日本語で交流することが、非常に有意義な経験になった。彼らは日本への情熱や行きたいという気持ちを交流の中で感じ、自分自身も学び続け、新たな挑戦をする大切さを再認識した。会話を通じて、日本人とスウェーデン人の文化や考え方を教わり日常のちょっとした表現や文化的な違いについての話は興味深いものになった。また、大学生ならではのバカな会話や LINE の連絡先の交換をして連絡を取るなど日本人以外とできたことがとてもうれしかった。言語を超えたコミュニケーションの難しさを感じながらも彼らの日本文化に対する興味や好奇心に応えられたり、国境を越えた交流が出来たことが最も印象に残っているエピソードだ。

3.今後に向けて

自分はスウェーデンに行くにあたっての下調べが足りないと感じたので、必要情報は調べたうえで訪れ、現地で質問できる機会を生かせるようにしたい。また言語の壁を感じることもあったので、英語の能力を上げることは会話の数も増え、自分の伝えたいことを伝えられるので、自信をもって英語を使えるようなレベルにしたい。今回の経験を生かして日本のまちづくりや福祉について知識を深めたいと感じた。

海外研修を終えて

高梨亜結乃

1.海外研修全体を通しての感想や学び

私は海外研修を通してスウェーデンと日本の福祉制度の差を感じることができた。スウェーデンは福祉が充実している国というイメージがあると思うが、実際に研修に行き施設訪問をし、お話を伺うにつれて日本とは異なる点が多くあり、自分が社会福祉士として社会に出たときに参考になるようなお話をたくさん聞くことができ、自分自身の成長につながる様に感じた。

例えば、初日に訪れた市役所でのお話では、虐待か疑われた際に、親と子供からしっかりと話を聞き、子供にとって安心する家になるには何が必要であるか、何があってはならないか、今、安心して暮らせているのか等を子供に考えてもらい子供第一で対応している点で虐待があった家庭で子供が安心して暮らせるための支援が行われており、ただその場しのぎで保護を行う日本のやり方とは異なる点を感じた。また、虐待を受け、一時保護をしなければならない子供たちが児童養護施設のような施設ではなく、ファミリー保護といい一般の家庭に保護されるという制度も日本との違いを感じた。これは虐待を受けた子供たちが一般の家庭に保護されることで目分の環境との違いを感じどのような環境が自分にとって安心できるのか学ぶことができ、その後の自分の生活環境を変えるきっかけになるものであると感じた。

このように、スウェーデンの福祉制度は、日本の制度とは異なり、問題が起こってから支援にフォーカスを当てていると感じた。このことから、私は、福祉で大切なことは、問題を解決することだけではなく、その問題がまた起こらないために何をするかが重要であると学ぶことができた。

2.特に印象に残っているエピソード

私がこの海外研修で一番印象に残っていることは、スウェーデンの大学生は、高校卒業後、アルバイトをしながら自分がやりたいことを見つけたり、大学を入りなおしたりする人がほとんどであるということだ。日本人は高校卒業後すぐに大学進学する人が多いため文化の違いに驚いた。私たちが交流したスウェーデンの大学生たちも私たちと同じ年代の人はほとんどおらず、多種多様な年代の方がいた。しかし、皆、年代関係なく話していた印象があった。また、本当に学びたいことを学んでいる人が多く、日本の大学生よりも熱心な学生が多いと感じた。

3.今後に向けて

私は今回の海外研修でスウェーデンの福祉の現状については実際に訪れて話を聞くことで具体的に学ぶことができたが、日本の現状についてはまだまだ学習途中であると強く感じた。今後は、より、日本の福祉制度について学びを深めることで、今回、海外研修で学んだことから、スウェーデンの福祉制度を日本に導入することはできるのか、導入するにはどのような工夫が必要なのか学びを深めていきたい。

海外研修での経験

福田 彩七

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

スウェーデンへの海外研修は、大学入学前からの目標であり、入学した際には必ず行きたいと考えていた。事前学習を通じて、スウェーデンについての知識を深め、現地に行くことで、その知識を実際に体験することができた。現地に足を運ぶことで、事前学習では気づかなかったことにも気づき、実際に行くことの重要性を改めて実感した。北欧にはなかなか行く機会がなかったため、初めての訪問で美しい街並みに圧倒された。また、視察先で働いている方から直接お話を伺うことができ、事前学習で学んだことに加えて、より深い知識を得ることができた。この研修はとても有意義なものだったと感じている。

2. 特に印象に残っていること

私がこの海外研修で特に印象に残ったのは、人との関わりだ。視察先で訪れたプレスクールでは、実際に通っている子どもたちと交流する機会があった。授業中に現地の子どもたちからの興味深い質問を受けたり、一緒に昼食をとったり、休み時間に外で遊んだりした。子どもたちは非常にフレンドリーで、大学生である私たちに対しても積極的に関わってくれ、とても楽しい時間を過ごした。また、ストックホルム大学の日本語専攻の学生たちとも交流があった。日本語が非常に上手な学生もいれば、日本の文化について熱心に質問してくれたり、けん玉や折り紙、日本のお菓子の興味を持ってくれたり、日本人として嬉しく感じた。今でも SNS を通じて現地の学生と連絡を取っており、海外に友達ができたことは貴重なことだと思う。また、さまざまな人との交流を通じて、ほとんどの人が母国語とともに、第二言語の英語も流暢に話していることに驚いた。私も日常会話程度の英語は話せたため、コミュニケーションには大きな困難は感じなかったが、もっと流暢に話せるようになりたいと強く感じた。これからさらに努力していく必要があると実感した。

3. 今後に向けて

海外に行くことで、自分が住んでいる日本との違いを理解でき、視野を広げることができた。さらに、人との繋がりを感じることができたことも大きな経験になった。しかし、海外に行くにはその国の文化を知ることが重要だが、何よりも大切なのは、自分の国・日本について深く理解し、他国の人に日本のことを聞かれてもしっかり答えられるような知識を持つことだと感じた。これからも自国についての知識を深め、さらに広い視野で物事を考える力を養いたいと思う。

海外研修を終えて

永井蜜柑

1.海外研修全体を通しての感想や学び

海外経験はあったが、今回のように「学び」を目的として、現地の専門職の方々のお話を聞いたり、施設を実際に見学したり、現地の学生と交流をしたり、といったように海外を巡る経験は初めてであった。スウェーデンの「今」を知ることができ、旅行でも言語留学でも味わうことが出来ない貴重な経験になり、参加して良かったと思う。スウェーデンは日本とはもちろんのこと、行ったことのあるアジアの国々とも異なる部分が多く、新鮮な出会いが沢山あった。この研修について入学前から知ってはいたものの、言語のレベルが足りないのではないかと躊躇していたが、今回参加を決めて良かったと思える研修であった。今回の研修を受けて、福祉の現場を伺うことの大切さに気付き、福祉だけでなく、その国、地域における社会的な特徴、文化について知ることが福祉を学ぶ中で重要であることを実感することができた。

2.特に印象に残っているエピソード

今回の研修で一番印象に残っているのはプレスクールの視察である。視察では保育士の方々のお話を聞いて、実際に施設内の様子を見学させていただいたが、自分が思っている幼児教育とは違った部分が多くあった。まずは子供たちの近くに自然があったことだ。施設の裏に丘陵のような場所があるという物理的な近さに加えて、定期的に山の中に探索に行くという部分から、自然の身近さを感じた。建物自体が木造建築であったり、遊び道具として木や枝、芋が利用されていたりした部分も自然を身近に感じさせる工夫であったと思う。さらに、プレスクールでの子供たちの活動について、子供たちが関心を持ったものをテーマに学びを深めるという取り組みが印象に残っている。まさに子供たちの「自主性」の尊重であり、日本の幼児教育ではあまり多くない形であると思う。はじめから答えを教えるのではなく、子供たちの疑問をもつ力、自分で考える力の育成を大切にしていることがよく分かった。就学前からこのような活動を通して自主性を身に着けることが出来るのは素晴らしいと思った。

以上のように様々な面で日本にはない取り組みを見ることができ、自分もこのような場所に通ってみたかったと感じた。また、乳幼児期の子どもをもつ家庭支援に関心がある身として、参考になる部分が多かった。特に「自然×学び」の活動については日本でも事例や取り組みがいくつかあることは知っていたが、一部の意欲のある子ども向けのものが多いため、施設の方針として子供たちに提供されている事例を見ることが出来て良かった。

3.今後に向けて

今回の研修を通して視野が広がったと思う。大学の講義で扱われる事象は国内の話が多いが、海外の福祉や文化の違いを肌で感じる事が出来たことで、取り組みを情報として知るだけでは完全に理解することが出来ないのだということに気づいた。実際、ゼミでの研究等自分の学習の中でネットや本からのデータのみで簡単に物事を考えてしまっている節があるため、今後は出来る限り実際に現場で働く人々のお話や現場の様子をより近い立場で知るようにすることを意識していきたいと感じた。そういう意味で、来年に予定している福祉施設での実習は貴重な経験であることに改めて気づき、実

習に対するモチベーションをより高めることが出来た。今回、実習予定先の分野も視察することが出来たため、スウェーデンと日本の現場の違いというものも考えることが出来るのは非常に嬉しい。

また、一つの分野だけではなく、高齢者、障害者、児童、地域開発といった様々な面からの福祉に加えて、心理の面でも学びを深めることが出来たことはかなり良かったと感じる。どの分野の支援においても多職種他機関連携が求められる中で、このように複数の分野に触れることが出来るのは有意義だと感じた。これらの学びを今後の自分の学習の中で生かしていきたいと思う。

海外研修を終えて

鍋田愛

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

ここまで遠く離れた海外に行くのは初めてで緊張していたが、非常に充実した1週間を過ごせた。様々な施設を訪れ、それぞれで丁寧な説明をうけたことで、ただの旅行ではできないような経験をたくさんすることができたと思う。スウェーデンでは当たり前だとされている制度や考え方、文化が日本とは異なるものばかりで、見習うべき点が多いのではないかと感じた。

例えばスウェーデンにはフィーカといって、普段の生活の合間にコーヒーやお菓子を食べてリラックスし、コミュニケーションを楽しむという文化がある。私たちが視察に訪れた際もほとんどの施設がフィーカの時間を設けてくれて、お菓子を食べながら施設の方々の話を聞いた。

2. 印象に残っているエピソード

福祉について学べたのはもちろんだが、現地の人たちの優しさが印象的だった。街で買い物をしていると、現地の若者が私たちを日本人だと分かって話しかけてきてくれて、以前彼女たちが日本に行ったときの写真をたくさん見せてくれた。スウェーデンの人たちのフレンドリーさや暖かさを感じることでできた経験だった。

またストックホルム大学の学生との交流では、日本のアニメや文化が好きなのだという話をしてくれる学生が非常に多く、こんなに遠い北欧の地にも日本の文化が伝わっていて、広く愛されているのだということが分かり嬉しかった。加えて学生たちは日本語の授業を受講しているのだと言っていた。それを聞いて、ヨーロッパにも日本語という1か国でしか使えない言語の授業があるのだということに驚いたと同時に、その授業を受けて日本語を話せるようになりたいと感じてくれている学生がこんなにもいるのだということが日本人として嬉しく感じた。

3. 今後に向けて

全体を通して非常に有意義な研修だったが、ストックホルム大学の学生と交流したとき、上手く英語で話せなかったのが唯一心残りだった。英語のスピードについていけず自分以外で話が進んでしまい、話を振られたときにも焦ってしまって、上手く言葉がでてこないことが多くあった。自分の意見を伝えるというのは海外では重要視されているように思えるし、たとえ流暢に話せなかったとしても積極的にコミュニケーションをとっていくことの方が大事なと感じたので、今後海外に行った際には積極的にコミュニケーションをとれるよう、英語の学習に励みたい。

海外研修を終えて

大房そら

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

スウェーデン研修を通して、挑戦することの大切さを学ぶことができた。私は今回が人生初の海外だったため、長時間のフライトで過ごせるか、コミュニケーションが取れるのか、現地の食事が食べられるのかなど、行く前の不安が大きかった。しかしこれらの不安を解消するために、とにかく行動に移すことを心掛けた。英語があまり分からないけれど何とか聴き取ってみる、食べたことのない物を取りあえず食べてみる、目的地にたどり着けるか分からないけれど向かってみる、など不安を行動に変換していった。

このように勇気を出してアクションしていったことで、自分に自信がついたように感じる。またこの経験から挑戦する意欲が湧いた。また別の視点から学ぶことの大切さを知ることができた。今まで私は日本で国内における福祉や心理しか学んでこなかった。そのためスウェーデンの視察先でその国、地域での問題点や解決策を学べたことがとても新鮮に思えた。またそれを日本でも取り入れられるのか、日本での問題と比較してどうなのかというように、多様な視点で考えることができた。

2. 印象に残っているエピソード

今回特に印象に残っていることは5日目の自由視察である。この日は観光を楽しんだのだが、店が早く閉まってしまうことや、買い物で現金をほとんど使わないこと、公共のトイレが有料であることが多いことなど、日本にはない感覚ばかりで自身の価値観が変わった。またスウェーデン人は自然が好きであると強く感じた。国内のいたるところに公園があり、多くの人がくつろいでいる姿を見た。日本にも公園があり、自然を好む傾向にあるものの、スウェーデン人ほど自然を日常に取り入れる人は少ないため、この自然と共存する感覚が素敵だと感じた。

3. 今後に向けて

今後に向けて、私は学習面において意識していきたいことが2つある。

1つ目は英語力を身に着けることである。スウェーデン研修において、現地の人と会話するときは基本的に英語でおこなわれた。またどこに行っても看板やメニューの言葉はスウェーデン語か英語であり、英語を利用せざるを得ない状況になることがほとんどだった。そのため瞬時に英語を聞き取ったり読み取ったりする必要があった。私は英語のリスニングとスピーキングが苦手なため、相手が何を言っているのか理解できなかったことや、自分の気持ちを言葉に表すことができなかった場面が多く、とても悔しかった。そのため今後外国旅行に行くまでに英語のスキルを磨いていきたい。

2つ目は日本の心理学について深く学ぶことである。今回の研修でスウェーデンの小学校や重度障がい者のための高等学校、医療機関など、さまざまな領域における現状や心理面のサポートについて学んだ。しかし日本での現状やサポートを十分に理解できていないことがあり、日本とスウェーデンとを比較して考えることが難しいことがいくつかあった。そのため心理実習や今後の授業などを通して日本の心理的支援について体感し、スウェーデンと日本の違いや、この研修で学んだことが日本の心理面の課題に活かせるかどうかなどについて考えていきたい。

海外研修を終えて

鈴木萌桜

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

海外研修全体を通しての感想や学び私はこの海外研修で初めて海外に出て、研修だけでなく、自由行動でもたくさんの学びを得ることが出来た。自由行動では、言葉も上手く通じず、話すのも怖かったが、いざ会話が成立した時の喜びは今まで感じたことがないものだった。研修ではしばしば日本との違いに驚くことがあった。福祉分野に限らず考え方など根本的に違うことがあり、自分の中の常識をひっくり返されたような気持ちになった。今回、海外研修に参加して、今までにない刺激を受けることが出来て本当に良かったと思う。

2. 特に印象に残っているエピソード

研修の中で特に印象に残っているのは、現地の大学生との交流である。大学生といっても日本と違って様々な年齢の人がいることが驚きだった。高校を卒業してやりたい事をやったり、仕事をしてから大学に入学することはスウェーデンでは当たり前にあることらしい。私が交流した中に 24 歳の生徒と 35 歳の大学一年生の生徒がいた。年齢差関係なくフレンドリーに話してくれて交流会は非常に楽しいものになった。日本でも年齢差があって大学に入学したものの少し馴染めなかったり、やりたいことはあるが、年齢が気になるという人が少なからずいるだろう。もし日本がスウェーデンのように少し自由な風潮であればやりやすいのかなと感じた。

移動中に印象に残ったものもある。今回我々は数日間スウェーデン市内の電車乗り放題というチケットを購入して動いていた。その移動中、案内をしてくれたエミルさんに聞いた話なのだが、スウェーデンでは市が鉄道に出資しており、どこまで移動しても同じ料金だという。だから現地の人達は定期券のようなものを利用して交通費を安く済ませているらしい。このような支援があれば市内の人の動きを活発にでき、各地で経済が回り、市民も助かる。このように日常の支援が行き届いている所にスウェーデンのすごさを感じることが出来た。

3. 今後に向けて

今回の海外研修で福祉分野でも日常でも日本と違う環境に触れることが出来て本当に良かったと思う。

この経験から学べることは大きい。現地で得ることのできた興味や関心を日本で伸ばしてここからの現代福祉学部の学びに繋げて行けたらと思う。

また、今回、初の海外に研修として行くという自分にとって思い切った決断をしたことで、様々なことに挑戦するハードルがいくらか下がったように感じられる。もう大学生で、やろうと思えば人はなんでも出来るのかもしれないという気持ちになれたのだ。これを機に様々なことに挑戦し、大学生のうちにできる限りの事を経験したいと思う。

海外研修を終えて

奈良岡明莉

1.海外研修全体を通しての感想や学び

日本にはない制度や施策などをたくさん知れて実りのある研修であった。全体を通して感じたのは、スウェーデンの環境の生きやすさだ。気温で言えば、9月と日本がまだ茹だるような暑さの中、フライトを終え、ストックホルムに到着した時は驚いた。24度と過ごしやすい気温と適度な湿度だったからだ。夏は過ごしやすいが、冬の寒さが厳しそうな印象を受けた。他にも、自然が豊かで、どこにでも木々が生い茂り、自然が常に身近にある生活を送った。首都ストックホルムですら至る所に綺麗に手入れされた木々を見た。また、スウェーデンは福祉大国と言われているだけあり、大体の施設にスロープはもちろん、充実した障害支援があることを知った。さらに、案内してくれる管理職の方は大体女性であったことも印象に残っている。日本であれば、管理職は男性、それ以外の雑務を女性が担っているイメージがあるが、スウェーデンは違った。さらに、幼稚園の見学の際、お迎えに来る父親の姿をよく見かけた。もちろん母親も迎えには来ていたが、日本ほど多くはなかった。日本の遅れていると言われている社会の制度や仕組みを思い知った。どんな年齢の人も、どんな性別の人も公平に扱うのがスウェーデンの特徴であると考えている。

2.特に印象に残っているエピソード

特に印象に残っているのは、小児科見学であった。日本の小児科に訪れた経験がないので比較はできないが、病院は怖くないところと印象付けるために楽器、スポーツ用品などが豊富に取り揃えられていた。図書館もあり、知的好奇心を満たすことに関しては尽力しているようだった。活動が制限されてしまう環境でも楽しく過ごせるように最大の努力がなされていたように感じた。また、プレイルームでのカウンセラーの働きを見ることができたことも印象深い。絵を描いている子どもがいたのだが、一切こちらを気にすることもなく集中していた。優れた環境と、カウンセラーのケアの賜物だろう。普通15人も見慣れない人種が一気に訪れたら、多少は不快な表情をするはずだと思っていたので心底驚いた。手厚いサポートと豊かな自然に囲まれた環境は日本では達成しにくい項目なのではないかと考えている。

3.今後に向けて

北欧スウェーデンには東南の日本には見られない制度、環境、施設があった。しかし、土地も違えば人も違うと思うので、全く同じ制度の導入は難しいだろうと感じた。研修での話を聞いていて、日本の良い点はそのままに、スウェーデンの良さを導入できたらもっと良くなると考えた。例えば教育場面でスウェーデンの制度を導入すれば、障害児の教育支援がもっと充実すると思う。スウェーデンの進んだ福祉制度を日本の人柄を踏まえて、見習う点と、自国を尊重する点で分けるべきだと考えている。この経験をいかにうまく日本の制度に組み込めるかが大事だと私は考えている。

海外研修で学んだこと

精松夢叶

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

スウェーデンでの海外研修は、私にとって学びと成長に満ちた 10 日間であった。海外に行くのは初めてで、渡航前は文化や言語の壁、生活習慣の違いに対する不安があったが、現地での経験を通して、挑戦することで道が開ける、という実感を得た。特に、現地の人々が親切に接してくれたり、私たちが不安そうにしているときに声をかけてくれたりしたことが大きな励みとなった。この経験から、文化や言語が異なっても相手を尊重しながら対話を重ねることの重要性を学んだ。また、初めて行く国でのバスや電車の乗り方を覚えたり、レストランで注文する際に自分なりに工夫して伝えたりする中で、自己効力感が高まった。この研修を通じて得た経験は今後の挑戦にも大いに役立つと思う。

2. 特に印象に残っているエピソード

3 日目に実施したストックホルム大学の学生との交流会は、研修中でも特に心に残る経験であった。大学見学では、現地の学生が丁寧かつフレンドリーに対応してくれた。日本に旅行に来たことがある人や、日本のアニメに興味がある人が多く、楽しそうにたくさん話してくれたおかげで、最初はとても緊張していたが、すぐに打ち解けて楽しくコミュニケーションをとることができた。夜の食事会では、事前に用意していた折り紙やけん玉などのレクを通して、よりくだけた会話をすることができた。また、4 日目の自由行動の日には仲良くなった学生が遊園地を案内してくれ、スウェーデン特有の文化や習慣を教えてもらいながら、楽しむことができた。このよう現地の学生との交流は、単なる観光では得られない貴重な学びとなった。

3. 今後に向けて

今回の研修を通じて、自分の視野の狭さと知識の不足を痛感した。特にスウェーデンの福祉政策や社会制度について学ぶ中で、日本の福祉制度や社会課題についての知識が不足していたため、十分な比較ができなかったことが反省点である。渡航前の事前学習では、主にスウェーデンについて自分自身の関心のある知識を学び、全体で共有したため、自国に対しての知識が浅くなってしまった。今後、ほかに研修に行く機会があれば、事前学習の質を上げて取り組みたいと感じた。また、この研修に参加して、先輩や他学科の学生と交流を持ち、仲良くなることができた。この縁を大切にし、今後の学生生活を過ごせたらいいと思う。

海外研修を終えて

田上 結海

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

私は今回の海外研修に参加し、改めて心理や福祉に関する学びを深めようという思いになった。大学での座学や日本での経験だけでは知ることのなかった北欧の福祉について学ぶことができたのは自分の学びの中でとても貴重な経験になった。1週間という研修期間だったからこそ、友人と福祉についてじっくり話すこともできたので、自分たちで福祉分野への知見を広げることができた。

また、スウェーデンという日本とは言語や文化の違う環境へ行けたことで、普段の生活を今まで考えていなかった視点から見つめ直すことができた。福祉分野以外では、歴史的建造物が多く、観光資源になっていると感じた点に関しても、日本と異なる歴史や背景を持つ国だからこそだと感じた。

2. 特に印象に残っているエピソード

私が特に印象に残ったことは、スウェーデンの人がとても温かかったことだ。エミルさんや訪問先の方に質問をした際は、どんなことも丁寧に説明してくれたのはもちろんのこと、交流した大学生や街中で会う店員さんの優しさに何度も触れた。スウェーデン語やスウェーデンの文化があまり分からず、英語も拙い状態の私たちと積極的に会話をしてくれたり、“日本人？”“楽しんで！”などと声をかけてくれたりなどといった出来事もあり、私自身初の海外で不安もあった中でも楽しむことができた。

3. 今後に向けて

まず反省点としては、この海外研修に応募した時には心理分野への興味は強かったものの、福祉や地域分野への興味があまりなかったために知識量が少なく、結果として心理分野以外の訪問先では自ら深く学ぶことができなかった。しかし研修に参加する中で福祉分野への興味が増しているため、心理分野だけでなく福祉分野の学びも積極的に行いたいと考えている。

海外研修を通して

津波古 美都

1.海外研修全体を通しての感想や学び

日本で福祉について学ぶ際に、『北欧』や『スウェーデン』という言葉は誰もが一度は耳にするものである。少子高齢化が進み、戦前に作られた社会保障制度の基盤が崩れ、新たな制度の考案が求められる現代日本において、世界の中でも福祉国家として一歩リードしている北欧諸国から得る学びは多い。しかし、日本でテレビや書籍から得る情報は限られたものであり、常に日本の手本のように伝えられてきた北欧諸国でも、生まれる結果はメリットだけでは無いのだということを、今回現地に赴き、知った。綺麗事のように思われがちな福祉政策は現地では実に現実的で実用的なものであった一方、画期的な福祉施設として紹介されていた施設は極めて限定的で現地では例外的なケースであった。これはスウェーデンに実際に自分で足を運んでみなければ知ることが出来なかったことであり、大きな学びとなった。

また、スウェーデンでの研修を通して、『平等』という言葉の本質と難しさの両面に気づくことが出来たと感じている。スウェーデンで訪れた研修先は、性別や年齢、障害の有無などに関わらず、誰もが等しく『1人の意志を持った人間』として扱われていたと感じた。特にカロリンスカ大学病院小児病棟にて行われていた、幼児に対するおもちゃや人形を使ったインフォームド・コンセントは、子どもの治療の決定権を親に求める日本では、なかなか無い価値観だと感じた。研修先の方のお話の中で出てきた「子どもは知る権利があり、決定する権利がある。また、自分たちが受けている治療に怒る権利もあるのだ。」とい

う説明は、子どもを極限まで1人の意思ある人間として尊重する方法であり、スウェーデンにおける子どもの社会的位置を表していると思われる。その一方で、重度心身障害の為の高等学校の先生方がお話ししていた「障害を持っている生徒たちは友達が少ない。そのため、友達が欲しくて一般科の生徒に関わり行ってしまう、トラブルとなるケースがある」という問題は、障害を持つ者と持たない者の壁を無くすことの難しさを感じた。この『平等』を尊重したことで生まれた良点と悪点を理解した上で、日本に取り入れるべきであると考えられる。

2.特に印象に残っているエピソード

重度心身障害の為の高等学校にて先生方が『安心できる椅子』として紹介していた、背もたれの高い椅子が特に印象に残っている。左右と背もたれの高さが非常に高く、囲むように設計されており、両側にドアスコープのようなレンズが付いている。これは周囲からの視線を遮ることができ、パニックになりやすい生徒や人の視線に敏感に反応してしまう生徒が落ち着くために有効だという。障害を持たない人だとしても、包み込まれるような感覚は非常に座り心地が良く感じられ、またデザインもシンプルなことから、公共施設などに設置することが出来ると思われる。障害の有無に関わらず、安心感やリラックス感が得られ、心理的負荷を感じた時の逃げ場所となれるこの椅子は、是非日本へも普及させていきたい。

3.今後に向けて

今回のスウェーデン研修は、私が目指す「心理職」という国内を中心に活動する職業に対して、グローバルな視点から新しい考えを与えるものであり、貴重な経験であった。社会全体で心の健康が問題視され、心理職が更に注目を浴びることになるであろう数年後に、今回学んだ知識を生かし、より現実的かつ画期的な福祉的アイデアを生み出すことが出来るよう、今後は得た学びをより深めていきたいと考える。

海外研修を終えて

山下純礼

1.海外研修全体を通しての感想や学び

スウェーデンでの7日間はとても濃く、あっという間に過ぎてしまった。事前学習でいくらスウェーデンについて学んでも、税金が高いから質の高い福祉を提供できるのだろうか、などと狭い尺度でしか考えられていなかった。しかし、実際にスウェーデンを訪れてみると、国民の福祉に対する意識やもとなる考え・文化なども影響していると身をもって体感することができた。海外のことに限らず、実際に体験したり、現場に赴いて見聞きしたりすることの大切さを学んだ。

2.特に印象に残っているエピソード

今回の研修で印象に残っていることは、スウェーデンでは「個人」を尊重しているということだ。子どもだから、大人だから、女性だから、男性だから、などと考えるのではなく、みんな1人の人間として見る価値観が根底にあるのだと感じた。教育や医療の現場ではその考えに基づいた取り組みを実施していた。小児病院では、子どもに人形やおもちゃの医療器具を用いて治療の説明をして、子ども自身にもやらせてあげることで今から何をされるのかを理解させていた。またプレスクールでは、子ども自身の意見を重視し、子どもの興味のあることを探究活動として行っていた。その際、子どもたちの意見が割れると多数決を行い、民主主義の練習もしているという。

さらに、ジェンダー的に平等というのも、この価値観に通ずるものだと思う。日本では育児等は女性中心というイメージがまだまだ残っていると感じるが、スウェーデンの街中ではベビーカーを押している男性が多かった。また、訪問先でお話を聞いた重要な役職についている人も若い人や女性がいて、日本のように勤務年数で組織を率いる立場に就くのではなく、能力や人柄など、その人自身が尊重されているのだと思った。加えて、トイレも男女共用の場所がほとんどで、ジェンダー的に考慮されていると感じた。しかし、ほとんどが有料で、設置数も日本と比べて少なく感じ、日本のように清潔なトイレが無料でたくさん設置されていることは当たり前ではないのだと思った。

3.今後に向けて

最後に、今回の研修では、いかに自分の知識が浅はかなものかということを痛感した。事前学習では主にスウェーデンの事柄を学んだため、日本ではそれがどうなっているのかを知らないことがあった。特に私は臨床心理の分野に興味を持って今まで学習し、分野が違うからといって福祉の分野を疎かにしていた。現地の人に質問できる機会がたくさんあったのだから、それらについてもっと学習していれば深い内容について聞くことができたのにもかかわらず、その機会を適切に活かすことができなかったと反省している。そのため今後は、興味のある分野にとどまらず広い視野で物事を見ることを意識したい。

スウェーデン研修 個人報告書

飯吉亮太

1.海外研修全体を通しての感想や学び

自分は初めての海外で、言語が通じない不自由さを痛感した。軽く英語ができるくらいでは、話すのが面倒になって、英語できる人に頼ってしまった。ゆえに、現地の人たちとあまり話すことができず、国民性などをつかめないまま終わった。英語が話せる海外は見える世界が違うのかなと思った。あとは、朝起きるのがつらい自分にとっては、ほぼ毎日6時半くらいに起きなきゃいけない、早寝早起き生活が少しつらかった。早寝早起きして、朝ごはんしっかり食べてたくさん歩いてなどの健康生活を送ったと思っていたが、やはり、気候が全然違うからか体調がすぐれませんでした。

2.特に印象に残っているエピソード

私は、スウェーデンで行きたいところが、魔女の宅急便の聖地しかなく、ストックホルムからは到底行ける距離ではなかったので、行きたいところがなくなってしまったのですが、事前ガイダンスでホテルの近くに海があるという情報を聞きました。なので、スウェーデン研修であった、唯一の行きたいところがホテルの裏にある海だった。私たちは、自由行動の日の朝9時に海に行った。その日の気温は9度くらい、寒い、、、普通なら入らないという選択肢もあったが、スウェーデン研修前から楽しみにしていて、海パンも持ってきていたので、入らない選択しはなかった。海に行くと、誰も泳いでいる人はいない、泳いでいるのは、カモくらい。このように、寒い中、カモと泳いだことがスウェーデン研修での印象に残っているエピソードだ。このエピソードを通訳のエミールさんに話すと何十年もやっていてそのような学生は初めてだと笑ってくれてスウェーデン研修の歴史の新たなページを作れて、誇りに思った。

3.今後に向けて

海外に行って、英語が話せない不便さを感じた。道を調べることなどはスマホさえあればできるが、お店での注文時に、メニューが読めず、翻訳にかけてもわからない、店員さんに聞くこともできないなど不便なことが多く、英語を勉強して、話せるようになりたいと思った。

海外研修を終えて

大久保萌花

1.海外研修全体を通しての感想や学び

海外研修全体を通しての感想や学びスウェーデンでの研修を通じて、実際に自分の目で見て耳で聞いて学ぶことの大切さを学んだ。

事前学習の段階では、スウェーデンは高福祉社会であり、福祉において最先端の国であると考えていた。しかし、実際にスウェーデンを訪れ、訪問先でお話を聞いたことで、青年の犯非数や高齢者の孤独など、様々な問題を抱えていることも知った。また、文字だけで理解したつもりになっていた福祉政策が実際に行われているところを目にしたことで、新しく学ぶ点が多くあり、より深い理解に繋がったと思う。さらに、現地に訪れたことで感じたスウェーデンの文化や風土は、福祉政策には大きく影響していると感じた。研修を通じて、机上で学ぶだけでは不十分であることを実感した。そして、実際に訪れることでより多くの情報を得ることができ、多角的な視点から考えることが可能になるということを学んだ。

2.特に印象に残っているエピソード

スウェーデンの学生との交流会が最も印象に残っている。交流会で話をした学生の中に、高校卒業後、1年間バックパッカーをし、その後大学に入学したという学生がいた。今回の研修で通訳をくださった現地の方のお話によると、スウェーデンでは、高校卒業後すぐに大学進学するのではなく、数年間の間、就職やアルバイトをして一度社会に出たり、長期旅行やボランティアをしたりした後に、大学に進学する学生も多いとのことであった。実際に、交流会で私が話したスウェーデンの学生は19歳から24歳であり、同じ学年であっても年齢に幅のある印象であった。日本では、高校卒業後はすぐに大学進学もしくは就職することが一般的である。しかし、自分が社会に出て何をしたいのか、何をすべきなのかについて考えるための時間的な余裕が必要なのかもしれないと今回の経験を通じて感じた。自分と向き合う時間が、将来の選択肢を広げたり、人生を主体的に生きるための糧になったりするのではないかと考えた。

3.今後に向けて

スウェーデンでの研修を通じて、自身の知識不足や学びの浅さを痛感した。訪問先でスウェーデンでの福祉についてお話を聞く機会が多くあったが、日本の現状を深く理解していれば、スウェーデンと比較ができ、より深い学びに繋がったのではないかと思う場面が多くあった。私は臨床心理学科であるが、これからは専攻にとらわれずに広く学ぶ必要があると感じた。また、語学についても、自分の知識不足から自律を持てず、積極的に話すことができなかったため悔いが残った。今後は、より英語学習に励むとともに、積極性を身につけていきたいと感じた。これからは、今回の研修を通じて得た学びや反省を活かし、自分の目で見て耳で聞いて、主体的に学びを深めていきたい。

海外研修を経験して学んだこと

和田美咲

1.海外研修全体を通しての感想や学び

スウェーデンは今回初めて訪れ、全てが新鮮だった。まず研修全体を通じて感じたことは自然がたくさんあり、建物はデザイン性に富んでおり、人が少ないため開放感があるということだ。気候も季節がら過ごしやすかったこともあり、本当にずっと開放的で気持ちが良いと感じた。また、日本との違いで1番衝撃だったことは、大学を何回も入り直す人が多いということだ。現地の大学生との交流会では様々な年齢の人がいて多様性に富んでいることに衝撃を受けた。これはスウェーデンでは大学まで学費が無料なことが大きく影響していると考えられる。日本でも全く同じ政策をすることは不可能だと思われるが、日本でも大学に気軽に入れるようにもってほしいと感じた。

2.特に印象に残っているエピソード

上記でも少しとりあげたが、1番印象に残っているエピソードはが現地の大学生との交流会だ。自分の英語のできなさを痛感しながらなんとか身振り手振りやネットで調べながら様々なことを話した。そのなかで印象に残っている会話は主に2つある。一つ目は日本のアニメや漫画、音楽の話だ。日本語専攻の学生ということもあってか、日本の文化がとても好きな様子だった。言語が違っても、そのようなエンタメコンテンツは世界共通であり、日本の文化を好きでいてくれることはとても嬉しく感じた。二つ目は、スウェーデン語と英語、そして英語の違いについての話だ。スウェーデン語と英語はかなり似ている部分があるが違いとしては、スウェーデン語は主語と述語の順番があまり決まっていないということだ。そこは日本語と似ていると言える。スウェーデン語とフィンランド語は隣国ということで似ているのではないかと思っていたが、かなり違うということを教えてもらった。スウェーデン語の方がシンプルで学びやすいと教えてもらった。そのため、日本人は学びやすい言語ではないかと感じた。

3.今後に向けて

一週間という短い期間ではあったがかなり濃く充実した一週間を過ごし、たくさんのことを学んだ。今後このことを生かしていきたいと強く思う。

スウェーデンの文化・概要

Svensk kultur och översikt

福田彩七 大橋満桜音 笹山富士子
青木航 津波古美都

1 概要

スウェーデン王国 (Kingdom of Sweden)

- 面積 約 45 万平方キロメートル (日本の約 1.2 倍)
- 人口 約 1,052 万人 (IMF2022 年)
- 首都 スtockホルム (人口約 98 万人)
- 言語 スウェーデン語
- 歴史 800~1050 年頃 【ヴァイキング時代】

出典: Map of Sweden - Guide of the World

1397 年 カルマル同盟によりデンマーク王がスウェーデン王として即位 1523 年グスタフ 1 世 (グスタフ・ヴァーサ) 即位

→デンマークから独立

1630~1648 年 グスタフ 2 世アドルフ、三十年戦争に介入

ウェストファリア条約で大国としての地位を確保

1814 年 ナポレオン戦争後、キール平和条約締結

→非同盟・中立政策

1868 年 「大日本国瑞典国条約書」締結、日本との外交関係を開始

1946 年 【国連加盟】

1995 年 欧州連合 (EU) 加盟

2022 年 北大西洋条約機構 (NATO) 加盟申請

2 経済的特徴

名目	数値	世界順位
GDP	593,267,701,033 ドル	(世界 24 位)
一人あたり	56,305 ドル	(世界 13 位)
物価上昇率	8.7%	
失業率	6.2%	
消費税率	6~25%	
GDP 成長率	-0.8%	

スウェーデンの経済は、2020 年頃よりコロナウイルスの影響から一時マイナス成長になり、翌年には回復したものの、2022 年以降はロシアによるウクライナ侵攻の打撃を受け、不安定な情勢が続いている。最新の GDP 値は世界 24 位と比較的高いが、物価上昇率や失業率の増加傾向、高い消費税などにより国民の生活は厳しい状況である。私たちが実際にスウェーデンで生活するなかでも、やはり物価の高さは日本と比較するとかなり高い印象であった。所得税と違い、国民全員が一律で納めることとなる消費税は、スウェーデンが誇る整備された公共機関や充実した社会保障制度を支える一方で、現在の経済状況では、国民の生活に重くのしかかってくるであろうと考えられた。

3 文化的特徴

- 食文化

北ヨーロッパ最大の国であるスウェーデンは北緯 59.3° に位置し、その緯度の高さから日照時間が夏は 18 時間以上あるのに対し、冬は 6 時間程度と激しい差がある。気温についても、冬は 1 日当たりの平均最高気温が 4℃未満となり、最も寒い月は平均最低気温が -5℃、最高気温は 0℃と厳しい寒さとなる。このことから、スウェーデンの伝統的な食文化における主食は、厳しい寒さでも栽培可能なジャガイモである。また、果物は育ちにくいと、コケモモ（リンゴンベリー）を代表としたベリーの栽培が盛んであり、ジャムやソースにして食べられている。その他にも様々な伝統料理があるが、一貫して言えることは、厳しい冬に蓄えておくため保存がきくように調理されており、味付けは塩と胡椒でシンプルにまとめられていることだ。スウェーデンの滞在期間中の食事、日本人にとっては少し味付けがシンプルで、塩味がきつい印象をうけるものが多かった。ストックホルム大学の生徒との夕食会にて、スウェーデンの代表的な美味しい食べ物を聞いた際も、「スウェーデンは気候の関係上、あまり食が豊富な国ではないから」と返答に悩んでいた。

- フィーカ “Fika”

スウェーデンの職場における暗黙の了解に、朝の 10 時頃と午後 3 時頃は電話をしてもつながらない、というものがある。これはスウェーデンの人が伝統文化として非常に大事にしている『Fika』を行っている場合が多いからである。Fika とは所謂「コーヒーブレイク」のことであり、コーヒーを飲みながら甘い焼き菓子やケーキ、シナモンロール、オープンサンド等を食べる癒しの時間である。しかし、日本における「休憩時間」と違い、スウェーデンでは Fika の目的に休憩だけでなく、「コミュニケーションをとる」というものがある。Fika の時間の間は軽食を片手に、上司や部下、教員と学生といった上下関係をなくし、自由な意見交換が行われるため、業務・課題のクオリティ向上や新しい視点を得ることにつながる。つまり、非常にインフォーマルなミーティングと言っても過言ではないのである。

実際に、スウェーデンで訪れた研修先の多くで、Fika の時間が取られ、コーヒーや紅茶と共に軽食が振舞われた。これは日本で言うところの「おもてなし」の文化とは違い、ただ座って業務内容のプレゼンテーションを聞く講義形式でなく、よりインフォーマルで気軽に質問や話をしやすい雰囲気を作り出すためのものだったのであろう。

4 考察

スウェーデンは 2024 年世界幸福度ランキング 4 位にランクインし、その社会福祉の充実さや世界をリードする文化的多様性、起業率の高さなどで世界から一目置かれていたが、実際の国民の生活や経済状況などから、そのネガティブな側面も伺うことが出来る。また、ポジティブな側面については、その背景にスウェーデンの国民性や伝統文化、あるいは地理的特徴なども関わっていることが推測できる。現代の日本社会に必要なエッセンスを抽出するためにも、より詳しい日本との比較や調査が必要となるだろう。

ティーレソ・コミュニティ (Tyresö kommun)

向山 彩音 精松 夢叶 境 悠菜

1. 概要

ティーレソ・コミュニティは、直訳するとティーレソ自治体といい、スウェーデンの首都ストックホルム県の中に位置するティーレソ市のことをいう。ストックホルム県の人口約99万人に対して、ティーレソ市の人口は約4万2千人であり、美しい自然で有名な地域のひとつとして知られている。スウェーデンには260のコミュニティがあり、ティーレソ・コミュニティはそのうちのひとつである。スウェーデンにおいて、国が外交や防衛・経済政策を、コミュニティの集合体であるラスティングが保健・医療の分野を中心に行うのに対して、コミュニティはより狭い範囲で教育や高齢者福祉・障害者福祉を主に担当している。そこで私たちは、ティーレソ市の市役所に訪問し、ティーレソ・コミュニティにおいて主にどのような福祉政策に取り組んでいるのか話を伺った。

2. 高齢者施策と児童施策について

高齢者支援では、支援が必要になった際、まず市町村に連絡することからプロセスが始まる。その後、個々のニーズを調査し、在宅支援が適しているか、施設での支援が必要かなど、適切な支援方法を検討する仕組みが整えられている。スウェーデンでは、少子高齢化と寿命の伸びによって高齢者施設の不足が深刻な課題となっている。この課題に対処するため、IT技術を活用した支援が進められている。例えば、市が高齢者にスマートフォンの使い方を教えることで、必要な連絡がスムーズに行えるよう支援したり、在宅治療を受ける高齢者への遠隔診断を実施したりしている。また、予防に重点を置き、健康維持を支援するとともに、高齢者の孤立防止が重要視されており、支援者家族向けの相談サービスやセミナーを通じて、ケアグループの形式で家族を含めた支援が提供されている。

児童支援では、スウェーデンのティーレソ市 (Tyresö kommun) において、虐待や、家庭内問題を抱える子供に対する支援が特徴的である。支援、調査の際には、子供の課題を解決だけでなく、子供の強みや得意なことをさらに伸ばす支援に力を入れている。具体的には、「不安なこと」「うまくいっていること」「これからすべきこと」の三つの分野に分け、子供が自ら文字に書き出すこと作業を通じて、自分の状況を整理し理解を深める場を提供している。この過程には家族も参加し、家族全体で課題に向き合う姿勢を育む。最終的には家族が支援に頼らず自立した形で問題を解決できることを目標に支援している。

以上のように、高齢者支援と児童支援のいずれも本人の意思や意見を尊重することが重視されている。また、家族が支援の一環として積極的に関わることの重要性が共通してみられる。これにより、個々の支援がより効果的で持続可能なものになることが期待される。

3. 考察

今回ティーレソ・コミュニティを訪問し、日本の福祉と比べ個人の意志を尊重する傾向が強いと感じた。例えば、児童施策の面において、虐待が発覚した際、日本ならばその子供を守ることを最優先するであろう。しかし、ティーレソ地区では不安なことなどを自分で書き出してもらうことによって、子

供の内面を深く知った上での支援を行おうとしていた。このように、子供や高齢者自身を尊重し大切にしていること、さらには子供でも高齢者でも自分の意志を持ち、それを発することができるよう育っているスウェーデンの環境は大変素晴らしいと感銘を受けた。日本でも徐々にでもよいので、もっと個を重んじ、発信できる社会になっていければよいのではないかと考える。

ヴァッテンユーレット・プレスクール

(Förskolan Vattenhjulet)

和田 美咲 海上 紗慧

1. 概要

プレスクールとは小学校に上がる前の教育システムであり、1 歳から通うことができる。スウェーデンではこのような就学前教育が充実している。就学前教育システムの歴史としてはまず、1985 年に親の就労の有無に関わらず、子供の権利として就学前の保育を保障するべきであるという法案が可決されたことによって、待機児童問題を克服し、1966 年には保育事業を社会福祉省から教育省に写し、学校として設立され、子どもの教育を受ける権利が保障されたのである。また、保育料としては、1 日 3 時間は無料に残りの保育時間は親の収入によって変わるが、ほとんど児童手当で賄える程度である。

今回訪問したプレスクールでは、1-3 歳までのクラスは 12 名の子どもにつき先生は 2 名であり、3-5 歳までのクラスは 1 クラス 15 名で先生は 2 人であった。親が働けるように 6 時半から 18 時半まで開いている。初めは親と一緒に来て、段々とプレスクールにいる時間も長くしていく。これは親との信頼関係を築くために大切であるし、子どもにとってもプラスである。また、プレスクールはコミュニケーションに連絡義務があり、洋服が小さすぎる・親が連絡しないなどの問題があったときには報告する。

2. 教育方針

主に、自立可能な教育・未来を目指しているということ、それぞれの子どもに価値があるとして、多様性を尊重していること、勉強しているプロセスを教育に取り入れているという観点から述べていきたい。第 1 に先生達は、子どもたちの興味に合わせた支援を行っており、子どもたちが関心を持ったことを一緒に学んでいる。例えば、ある子が「カタツムリは、石を食べるのでは?」と言った時には実際にカタツムリは何を食べているのか調べる。また、ある子が「ありはどんなことをしているの?アリの巣の中は、どうなっているの?」と言ったときには子ども同士で話し合ったり、アリの巣を発見しに森へ行ったりする。

そして今度は「アリの巣は、何でできているのか」について考える。先生は、子どもの理解促進のためにビデオを観せた。子どもたちはそれをもとにアリの巣を作ってみた。(写真)

プレスクールには広々とした庭があり、そこで見つかったものを室内に入れたりもしている。

プレスクールは 1 年を通して前述したカタツムリや、ありに関することだけでなく、同時にいくつかのプロジェクトをしている。子どもたちだけでは進まないのも、先生達は筆問したりしている。

このように、こちらのプレスクールでは先生方が連携しながら、子どもたちの多様性を受け入れている。また、子どもたちが関心を持ったことに対してすぐに答えを出すのではなく、自分達で考え、話す機会を設けることで自立を促している。そして結果がどうであったとしても、子どもたちが自ら考え行動したというそのプロセスを重視していた。

3. 考察

訪問先のプレスクールでは障害を持った子も一緒に教育をすると聞き、インクルーシブ教育制度の発展を痛感し、そこが大きく日本と違うと感じた。そのような小さい頃から多様な人々がいる状況で生活していたら相手に寄り添い理解する姿勢が自然と身につくだろうと考えられる。また、プレスクールでは子ども一人ひとりにあった教育をするために様々な部屋や遊具が用意されており、その多さに大きな衝撃を受けた。このような一人一人に寄り添えるような教育システムを日本でも取り入れるには保育士の待遇をまず上げることが必須だと強く感じた。(和田)

子どもたちが、カタツムリやアリに関心があるということを知って、(その関心は、いったいどこから来るのだろう)と、疑問に思った。しかしプレスクールの庭や森を視察させていただいて、その疑問は解消した。非常に広々としており、(ここで過ごしたら、子どもたちはのびのびと、心に余裕を持って成長できるな)と思ったと同時に(広々とした自然から、自然に関する様々な疑問を導き出すことができるのだろう)と感じた。日本の保育園にはスウェーデンのような森や庭は用意されていない。施設の近くに、自由に遊んだり、見たり触ったりできる空間が用意されていることは、子どもたちが心身ともにのびのびと成長する上で、重要であると感じた。また、先生達のお話を聞いて子どもたちの興味関心を否定しない姿がとても素敵だと思った。近頃私たちは、やりたいことがあっても、ゴールまでの距離を想像して諦めてしまったり、最速で行くにはどうしたら良いのか考えてしまったりしがちだ。しかし、プロセスを大切にすることで、自分の成長が感じられたり、新たな発見ができたりして、より豊かな心を持った人間になれるのだろう。今回先生方は、子どもたちの考えたことに対するプロセスを大切にしているというお話を聞いて、私の中で忘れてしまっていた大切なことを、思い出すことができた。(海上)

【参考文献】

参考文献

Oriori 「スウェーデンの教育を紹介！なんと1歳からの就学前教育（プリスクール、forskola）が無償」
<https://ori-ori.jp/2005037> （閲覧日:2024年11月18日）

第2のエコシティ ロイヤルシーポート地区

(Stockholm Royal Seaport)

加藤玲菜・塚原浩輔・永井蜜柑

1 概要

ロイヤルシーポートはかつてガスや原油のタンク基地だったところをエコシティにするために2011年から大規模な開発を進めている地域で、いかにサステナブルな街をつくるかということを今まさに追及している地区である。地域開発目標として「2030年脱化石燃料」を掲げており、歩行者に関する「ウォーカブルシティ」という計画も取り入れている。

2 視察での学び

今回の訪問では、市町村環境部の気候変動とエネルギー担当の方にお話を伺い、街を案内して頂いた。やはりロイヤルシーポートは新しいプロジェクトであり、政治家は環境に優しい、持続可能な街づくりを提唱しているようだ。以下に視察でのお話や印象に残ったものについてまとめる。

(1) 住民との協力

ロイヤルシーポートでの地域開発を進める中で大切にしているのは、「元々住んでいる人たちがこのプロジェクトに参加できるようにすること」である。定期的に市民に対して情報提供を行っている。お話を聞いた日も数週間後に情報提供をするイベントを控えており、そこでは住民全体を招待し、広場に模型を持っていったり、街をガイドしたりすることが予定されていた。イベントには技術系の専門の人たちも参加し、直接的に市民と話す場を設ける予定であった。さらに、良かった点や改善点、もっと見てほしい点を市民

から集める場所も設置することがあるそうだ。これは行政のみですすめて、考えが一辺倒になったり、自分が正しいと思い込んでしまったりすることを防ぐ目的がある。このように、市役所の方々が中心でありつつも、様々な分野を見ながら、住民の意見を多く取り入れながら街づくりを行っていることが分かった。

(2) プロジェクトについて

この地域開発は、この地域で特別なことをするのではなく、他の地域でも活用できるようなシステムを作ることが目的とされている。課題としては立地の良さによる土地代の高さが挙げられていた。今の状況のままでは収入が高い人しか移り住めないため、どうやって一般の人でも住めるように出来るか、ミックスできるようにするかについて検討されている。もともとロイヤルシーポートの開発はストックホルム市の人口の増加に対応するためのものであるため、重大な課題であると考えられる。

また、エネルギー面について将来、太陽熱で温めたお湯をためておきたいというお話があった。これは太陽エネルギーを使って建物を温かくするためであるが、今何か出来るのか、どうやってタンクに貯めて使うのか、等計算している段階であった。

(3) 視察で印象に残ったもの

① ゴミ捨て場：マンションの外に設置されているゴミ箱を見ることが出来た。(写真1) これは地下に通したパイプで港まで繋がっており、港にある大きなコンテナにゴミが集積される仕組みである。つまり、ゴミ収集車がいらないということであり、かなり画期的な仕組みである。



② 庭：マンションの庭には特別なルールがあった。木を何本植えるか等『点数』が決まっており、この点数が不足しているとやり直しになるそうだ。このシステムが庭造りによく使われており、屋上緑化にも利用されている。ただ自然を増やすというだけではなく、これらの植物によって雨水が建物の下に入らないようにするという面も持ち合わせている。

③ レンタルカー：車をシェアするシステムがあり、簡単に使えるアプリでやりとりが出来る。視察の中でも道路で駐車している車が少なく、停まっている車はほとんどこのシェア用のレンタルカーであった。路駐には高いお金がかかるとともに、住民が所有する車は地下にある駐車場に入れていることが多いため、町中の車の量が少なかったように思われた。そもそも駐車場が二家庭に一つということで車を持っている世帯が少ないことが分かる。これはシェアシステムによって車を持つよりも安く済ませることが出来るという理由がある。

3 考察

地区の視察では、事前に調べていた事象をこの目で確かめることができ、実際にエコシティとして計画が進められている街づくりについて具体的なイメージを持つことが出来たと思う。私は普段の講義では地域よりも福祉をメインとして学んでいるため、実際に地域づくりを事前学習し、現場を訪れるという経験が出来ていなかったが、今回の研修でこういった現場を訪れ、今まさにまちづくりを行っている方のお話を聞いて、街の様子を目で見ることの大切さを知ることが出来た。また、ウォークアブルシティについては、ロイヤルシーポートだけでなく別の場所でも自転車の交通量がかなり多く、道も自転車専用のものが整備されていた点が印象的だった。日本に比べると「通勤」の手段として多く利用しているように見えたが、とにかくストックホルム市全体でエコ意識が高く、行政の計画として考えられているだけでなく、実際に市民の生活に反映されているものであることを知ることができた。自転車利用の促進については日本も取り入れやすい部分だと感じた。(永井)

ロイヤルシーポートを視察して強く感じたことは、ロイヤルシーポートは何に対しても優しい街であるということだ。街には地下のパイプで港までゴミが運ばれるシステムがあるなどゴミ収集車をなくすことで環境に優しいと言える。また、住民に対しては定期的に都市開発に関する情報提供を行って

いたり、2年ごとにアンケートを書いてもらうなど、住民がプロジェクトに参加できるように、住民への優しさも忘れない。さらに道路の真ん中には緑の廊下といわれるような自然の通り道が作られていたり、地下にはカエルのためのトンネルがあるなど、虫などにとって高速道路のような通り道が作られていて、虫にも優しい街であることが分かった。もちろん日本でも環境への配慮はされ始めているが虫などの生物に対する配慮はあまりなく、ぜひ生物を大切にする姿勢を見習って欲しいと感じた。このように何に対しても優しい街づくりを行うことによって持続可能な街が作られるのだと考えた。(塚原)

ロイヤルシーポート地区の視察を受けて、この地区が持続可能なまちづくりの先駆的な取り組みがなされていることがわかった。サステナブルという観点で、この地区ではエネルギーや自然に注力していたことがわかった。

街を歩いていても視界のどこかには必ず自然や植物があり、特に住民が庭を管理して点数がつけられという制度が新しい概念だと思った。住民が管理することで自然への意識が高まると考えた。また、この地区では事業に取り組むにあたって住民への配慮や連携がなされていることもわかった。市民への専門的な説明会を行ったり、市民の意見を集める機会を設けたりする等、市民と一緒に取り組んでいると思った。

ロイヤルシーポート地区は、近代的でありながらも自然豊かな暮らしが体现された街だと思う。
(加藤)

スタートアップ支援 Stockholm Business Region AB

等々力あかり・西谷まりな

1. 概要

スウェーデンでは、音楽ストリーミングサービスの「Spotify」やカジュアル衣料の「H&M」、「IKEA」など、スタートアップを含む世界的な企業を多く輩出している。この大きな理由が積極的なサポート策の存在が大きい。スウェーデンでは、国が「企業」「スタートアップ」「教育」の三つを連携したエコシステムを構築しており、スタートアップ育成環境の整備に力を入れている。そのサポートを行っている会社の一つ「Stockholm Business Region」について紹介する。この会社はストックホルム市の公式ビジネスおよび観光地開発会社であり、ストックホルム市の国際プロモーションと戦略的開発を担当する会社である。ビジネス、国際、投資、人財、訪問者など様々な面から魅力的で持続可能な観光地としてストックホルム市をプロモーションし、開発することに力を尽くしている。

2. 具体的な支援方法

この会社では多岐にわたる支援を行っているが、そのなかでも、企業のスタートアップ支援についての取り組みを抜粋して述べていく。外国企業に対しては、ストックホルム市でビジネスを立ち上げ、活気がある市場にアクセスすることができるようなシステムが構築されている。会社のビジネス専門家が設立プロセスなどの全体を通じて起業をサポートしているし、外国の企業がスウェーデンに訪れやすいように、航空便などの増大や直行便の整備なども行っている。また、起業をしたい若者に対しても支援を行っている。ストックホルム市では毎年夏休み中に高校生のためのアルバイトを提供しているのだが、その中に起業家になるために学べるプログラムを実施している。さらに起業をするための相談も10時間までなら無料であることができる。加えて教育現場にも支援を取り入れている。スウェーデンでは小学校から起業家の勉強を授業の一環として行っている。また、高校では一年間のうちに自分で会社を作るなど起業の勉強が積極的に行われている。

3. 考察

社会福祉の充実が起業を抑制する効果があると研究されているのだが、スウェーデンでは起業環境を整え充実した社会保障と活発な起業を両立している。現在先進国は知業時代にあり、ソフトウェア、情報、デザイン、ブランド、特許、サービスなど知的財産、知恵産業が大きな付加価値を生む。スウェーデンは福祉先進国であり、経済と福祉を両立させ持続させる秘訣が上記のサポートシステムや教育であると学んだ。

また、学生時からの起業教育や実際の起業サポートで終わらず、ストックホルムスケールアッププログラムを組み全市全体として成長する努力をしている。起業がゴールではなくエコシステムを構築することで持続可能な成長を実現していることがわかった。



若い心理療法士の働くクリニック

(Barn-och Ungdomspsykiatri-BUP)

田上結海・秋庭夕葵・山下純礼

1.概要

BUP はストックホルムにある青年精神科医療センターで青少年の精神疾患や発達障害に関する精神科医療を提供している。一般の病院では対応できない患者が BUP に通院しており、集中的な治療を受けに来ている。そのため、一般的には2～3週間に1回の通院頻度が BUP では週に数回であることが多い。一般の病院から紹介されて通院していた患者に症状の改善がみられた場合、元々通院していた病院に戻る場合もある。

医師や看護師の他に、臨床心理士やソーシャルワーカーも勤務している。患者とスタッフ双方の安全のためにスタッフは2人体制をとっている。また、患者は未成年であることから親がいなければ訪問することができないという決まりがある。

2.実際に行ってみて分かった実態

スウェーデンでは、医療センターによって専門が分かれており、発達の検査だけを行っているところや、救急外来があるところなどもある。BUP は2～18歳までの病院である為、主に ADHD や自閉症の対応をしている。そして通院している患者には不登校の子が多く、不登校は基本的には学校で解決するものだが、しきれない場合は病院に来る事がある。そしてその場合には、学校とも連携しながら治療を進めていく。

それぞれの治療についてはストックホルム市の方針用の本があり、医師、看護師、カウンセラーや療法士など、職種ごとにやるべきことがしっかり決まっており、治療の為のプロセスマップがある。しかしながら不登校についてはプロセスマップがないため、今 BUP で作っている途中である。また基本的には認知行動療法を行い、必要があれば薬物療法と並行して治療を行う。

3.感想・考察

BUP は一般の外来だけでは対応しきれない患者を受け入れるため、治療頻度も一般の外来と差があり、一般の外来では2～3週に1回のところ、BUP では週に2～3回に加え必要に応じて患者の家に訪問することもある。日本では BUP のような重度の患者にフォーカスを当てた施設は少ないため、日本でもその必要性が広まるべきだと思った。

スウェーデンでは、ここ20年ほどで発達障害に対するスティグマが少なくなっているという。それまで精神科という場所には抵抗があると感じる人が多かったが、今では違和感を覚えればすぐに来院する人が多いと言っていた。また、「自分は自閉症だ」などとオープンに話す場合もあるそうだ。このことから、スウェーデンのように大きな精神医療システムを構築できるのも、国民全体の精神医療への意識が影響していると思った。日本ではまだ精神疾患への理解がまだ進んでいないと私は考えているため、スウェーデンのような精神医療を実現するためには、まず全体の意識改革が必要だと考える。

スウェーデンでは Fika の文化があり、仕事等の間にお茶をしてリフレッシュする習慣がある。研修の訪問先ではほとんど毎回と言っていいほど Fika を用意していただいた。BUP でもシナモンロールと飲み物をいただき、Fika しながらお話を聞いた。ここでいただいたシナモンロールはとても大きく、シナモンの風味が強くてとても美味しかった。



カロリンスカ大学病院小児病棟

(Astrid Lindgrens Children's Hospital)

中野梓・鍋田愛

1. 概要

カロリンスカ大学病院は、ヨーロッパ最大級の大学病院の一つであり、スウェーデンのストックホルム県にあるフディングとソルナの2か所に拠点を構えている。この病院は、世界的に高い評価を得ている医学教育研究機関、カロリンスカ研究所と密接に連携し、長年にわたって優れた医療発見や技術革新を数多く生み出してきた。病院の運営はストックホルム県からの予算支援に加え、個人や企業からの寄付によって支えられており、十分な資金を確保している。その結果、カロリンスカ大学病院はスウェーデン国内においても高度な医療体制を整備し、質の高いスタッフと充実した設備を維持している。さらに、研究、教育、臨床の各分野における進展を支えるとともに、国際的な医療の発展にも大きく貢献している。

2. 実際に行ってみて分かった実態

私たちは実際にこの病院の小児病棟を訪れ、お話を伺うとともに実際に使用している部屋などを紹介していただいた。中でも最も印象に残ったのは、子供たちに対する治療の説明についてである。この小児病棟では、子供に今後受ける治療を理解してもらうため、人形やおもちゃを使用したり、実際の手術室をみたりするそうだ。人形はただの人形ではなく、管をつなげたり髪の毛の取り外しができる使用になっているため、がんの治療による脱毛などが分かりやすく理解できる。実際に見せていただいたものは思った以上に細かい部分まで作られていて、これを使えば自分の病気、治療の十分な理解に繋がるだろうと感じた。

また人形以外にも、色水を使って自分で血液検査に似たことをするという取り組みもあるそうだ。これらは、治療の全貌が分かっていることで取り除ける不安が多いだろうという考え方をもとに実施されており、それぞれの子供に合った対応をとるよう心掛けているとのことだった。

3. 考察

見学させていただいた小児病棟全体を通して、明るい雰囲気であったことが非常に印象的だった。入院しているからといって遊ぶべきではないということではなく、入院しているからこそ子供たちのやりたいことや興味のあることをさせてあげる、という考え方があるそうだ。たとえ病気であったとしても子供らしさを大切にすることが素敵だなと感じたし、日本にも取り入れるべき考え方なのかなと思った。

また、たとえ患者が子どもでも、自分の病気や治療について理解してもらおうと努める取り組みは非常に勉強になった。年齢に関わらず自己決定を大切にしている価値観は印象的で、見習っていきたいと感じた。

参考文献

About Karolinska. Karolinska University Hospital (閲覧日:2024 年 11 月 11 日) About us Karolinska University Hospital (karolinskahospital.com).

Husbygårdsskolan ハズビーガルスコーラン

1.概要

幼稚園から9年生までの学習制度。校舎は幼稚園と1～9年生が学ぶ校舎の2つ。従業員は約100名。数年間、功績値が200を超えている市営学校。生徒数は470人。担任は3人体制で、大人は誰でも「自分にとって物事がうまくいくことが重要だ」という考えに基づいて仕事をしている。

Husbygårdsskolanは受賞歴のある学校であり、教育者と校長は、各生徒のために毎日行った優れた取り組みに対して、いくつかの賞を受賞している。2021年から、この学校は、教育を成功させるための優れたモデルを作成するためにスウェーデンで選ばれた6つの学校のうちの1つである。

2.学習環境

機能的な施設では、知識の目標に到達し、適切な教育を受けることに重点を置いている。1年生までの就学前クラスは、学校と長期休暇の両方で2回のホームステイに分かれている。授業の構造が共通であることで、子供たちが、すべての教師のすべてのレッスンで自分自身を認識できるようになっている。また、どちらの校舎にも充実した学校図書館があり、学校の全員がたくさん本を読むように取り組んでいる。ここでは、コミュニケーションやフォローアップにデジタルツールを活用している。屋外環境校庭が2つあり、両方の校庭で大人主導の活動をする。体育の先生が、午前中、休み時間、午後に活動をしている。校庭にいる大人たちは、生徒が安全で楽しい外出ができるようにサポートする。また、スイミングホールやアイスリンクに近いので、移動し、体験する機会がたくさんある。

・職員

生徒の健康と良い成績のために活動する大規模な生徒保健チームがある。養護教諭をはじめカウンセラー、学校心理士、職業指導カウンセラーがおり、労働チームには独自の特別教師がいる。

・施設の職員

生徒の不安や課題点を解明するためにチームとなって取り組む。障がいを持つ生徒や家庭環境に問題を抱えた生徒などケースは多様であるため、職員や市町村と連携してひとりひとりに合わせたサポートを行っている。

・養護教諭

予防接種や視覚・聴覚等の健康診断を担当している。また治療が必要な場合は地域の医療センターやクリニックへ繋げる。

・スクールカウンセラー

当学校は移民の生徒が多いため、フルタイムで勤務している。カウンセリングは基本的にグループで行うが、必要に応じて個人面談も対応している。また家族面に虐待等の不安がある場合は家族面談を行う等、市町村と連携を取る。

・ソーシャルワーカー

不登校予防として、欠席している生徒へのサポートを行う。まず生徒の欠席日数の情報を受け取り、欠席理由を確認する。翌月になってもその生徒の欠席が減らない場合は、カウンセラーと連携を取り、生徒と相談を行い支援していく。その際生徒と1週間の計画を立てたり、ソーシャルトレーニング

ングをしたりして、学校に行きやすくなるように生徒の不安に応じたサポートをする。また欠席理由が子育てできない状態にあるなど親の問題である場合は、市町村のサポート機関に繋げる。

3.考察

スウェーデンでは、日本と違い幼稚園と小学校が一緒に、基礎学校という名前になる。9年間のカリキュラムであること、それ以降は高校、大学と進学し、日本とさして変わらない。しかし、スウェーデン国籍を有していれば小学校から大学まで学費が無料であることは大きく日本と違うと感じた。さらに、入試制度を導入していないため、学力だけでなく、成績も加味されつつ、希望する大学に進学または就職するそう。高校での成績は一生ものらしく、就職した後もその成績で大学に入学することができる。いつでも学ぶ機会を得られることは個人のQOLを重視するスウェーデンらしい制度だと感じた。また、学校職員の手厚い対応は多様性の尊重の表れだと感じた。幼稚園児から15歳位の青少年まで幅広く支援するのは決して簡単なことではないはずだ。スウェーデンほど心理支援を重要視する姿勢は日本であまり見られないのでこれからの教育現場にこのようなカリキュラムをいかに組み込めるかが大切だと感じた。



ストックホルム大学生との交流

ストックホルム大学交流班

1. スtockホルム大学内キャンパスツアー

ストックホルム大学の学生による大学構内のキャンパスツアーを実施してもらいました。残念ながらストックホルム大学の事情で建物の中には入れなかったのですが、外観を見ながらキャンパスについて紹介してもらいました。お互いに母国語ではなく不慣れな英語だったため緊張しつつでしたが、丁寧にお話しいただいたことでストックホルム大学のキャンパスライフを垣間見ることができました。

2. 学生交流会

ストックホルム大学から会場を移して、ストックホルム市内にある障害者向け就業プログラムを実施している高校のレストランで、コース料理を楽しみながら交流会を行いました。交流会の中では、事前に準備していた法政大学の英語資料を基にプレゼンテーションを行い、ストックホルム大学の学生に法政大学のことをより知ってもらいました。ストックホルム大学の学生からは「スウェーデンと日本の大学の違いを知れた」「日本の大学の雰囲気を知ることができて、とても勉強になった」といった感想を聞くことができました。プレゼンテーションのあとは各テーブルに分かれて、法政大学についてより深く話をしたり、日本のアニメなどのサブカルチャーや文化、スウェーデンの文化の話をしたりと英語でのコミュニケーションを楽しみました。



教員挨拶

現代福祉学部 岩田美香

8月31日の夜に羽田空港に集合し9月8日の夕方に成田空港で解散した9日間の海外研修は、数か月ほど前のことですが、遠い思い出のような、それでいて細部は鮮明に目に浮かぶ、懐かしくもあり新鮮な日々でした。海外研修がコロナ禍で中止となっていたように、私自身も海外へ行く機会が遠のいていたなかで30名の学生を引率していくことに、出発前は何かしらの緊張感を覚えており、その緊張が一気に解けたせいかもしれません。私は今回で2回目となる海外研修の引率ですが、前回からは10年以上の時を経ており、勝手が違っていることや自分自身の年齢も考えると、私がみなさんの足を引っ張らないように・・・、みんな元気で無事に研修を終えられるように・・・と考えていました。

台風の影響によるフライトを心配していましたが、夜の羽田空港には遅刻する人もなく全員が顔をそろえ、出発の日までの事前学習や事務手続きで支えてくれた事務課の釜野さんも見送りに来てくださいました。みんなで記念撮影をして旅がスタートしました。どの見学先も興味深い内容で、行く先々において、私も学生と一緒に質問をしていましたが、なかでも学生たちが活気づいていたのは、現地の学生や子どもとの交流を伴うプログラムだったようです。様々な問題を抱える子どもをサポートしている小学校を見学した際には、グループに分かれて教室を訪問し、その教室内で子どもたちと行った交流に笑顔が出て、なかには子どもたちが描いてくれた絵を大切にしている学生の様子もみられました。また、毎回好評であるストックホルム大学生との交流では、グループに分かれて現地大学生がキャンパス内を案内してくれるというプログラムと、障害者の就労支援を実施している高校のレストランでの夕食会という二部構成になっていました。日本の学生たちは、昨年の交流の様子をもとに交流会の準備を進めていたのですが、会場が昨年ほどのスペースが確保できないなど、せっかく準備してきた交流内容が十分に展開できなかったことは残念でした。けれども、その場で臨機応変にアレンジして実施し、ストックホルム大学の学生たちも日本の文化や遊びに触れて喜んでいる様子でした。今回の学生たちの対応には「さすが!」と感心しましたが、今後は、事前に情報を伝えてもらう必要があると思います。さらにこの日は、午前中から都市計画のロイヤルシーポートの訪問と病院内の小児病棟にある学校訪問を行った後のストックホルム大学との交流プログラムだったため、若い学生たちであっても疲れている様子がうかがえました。

宿泊したホテルは駅の近くであり、向かいにはショッピングモールもあるロケーションだったので、毎日の夕食やちょっとした買い物に便利な所でした。今年度も、見学の移動は公共交通機関と貸し切りバスを併用する形でしたが、それは、この宿の立地条件ゆえに可能だったと思われます。公共交通機関を使いこなせることにより、学生たちは自由行動の日も自由に動けたようですが、研修の時には30人という大所帯で動いていたため、乗り換え時の点呼にも時間がかかり学生の疲労度も増してきている日もありました。短期間とは言え海外の生活は疲れるものなので、見学プログラムの量と交通手段については、学生の体調も加味しつつ考えていく必要があると痛感しました。

今回の研修を無事に終わることができたのは、様々な支え手のおかげです。この場を借りてお礼を伝えたいと思います。先にも記しましたが、釜野さんをはじめとした現代福祉学部の事務課のみなさんから事前段階からのサポートがあり、現地ではエミルさんとSQCのスタッフにお世話になりました。

エミルさんは引率に加え通訳も一人で行っていたので、とてもお疲れになったと思います。また旅行全体を支えてくれたのが京王観光の長谷さんと小浦さんです。小浦さんは同行者の中で一番学生と年齢が近いこともあり、学生からも身近な存在として頼られ、また学生への細やかな配慮もいただきました。最後に、私にとって一番に心強かったのは、もう一人の引率教員である山本五郎先生の実在です。一連の教員業務においても適切なアドバイスをいただき、現地においても、学生たちの点呼をメールで取る際に「一言コメント」を記してもらったというアイデアもいただきました。このおかげで私たちが毎日の学生の様子や感想を知ることができ、学生にとっても負担にならないボリュームで、その日の振り返りを記すことができました。みなさま、本当にありがとうございました。

海外で一緒に学びを経験した学生のみなさんは、どのような日々を過ごしているのでしょうか。帰国してすぐに何かの変化が起きるということは少ないかもしれませんが、この恵まれた経験が、みなさんのいつかどこかに影響をあたえるものになれば・・・と願っています。

教員挨拶

法政大学現代福祉学部 教授 山本五郎

まず、2024 年度の海外研修が大きな問題もなく終了し参加者全員が無事に帰国できたことを大変嬉しく思う。

コロナ禍の影響で実施を見送っていた海外研修が 2023 年度に再開されたが、昨年度は各グループ約 20 名の 2 グループ体制という変則的な形式であった。今年度は 1 グループ 30 名の体制で実施することができ、ようやくコロナ禍以前の水準に戻ってきたと言える。

2024 年度の海外研修では、応募者数が例年を大きく上回り、倍率が 1.5 倍以上となった。これは、コロナ禍で参加できなかった高学年の学生の応募が多かったことが一因だが、同時に海外での学習体験を求める学生のニーズが高まっていることの表れでもある。今後の応募者数の推移に注目したい。

事前学習では、テーマごとに分かれたグループがプレゼンテーションを行い、工夫が凝らされた質の高い内容が多く見られた。時間の都合上、各プレゼンテーションは引率教員の質問や簡単なコメントで締めくくり、次のグループへ移る形式をとったが、学生同士の質問や発表内容についてのディスカッションなどに時間を割くことができれば、渡航前にさらに質の高い学びの機会となったと考える。

また、研修プログラムの調整に時間がかかったため、参加者が決定した時点ではすべての詳細を開示できず、学生の事前学習や現地学生との交流会の準備に影響を与えたことも課題として認識している。研修先の情報をできるだけ早い段階で開示できるような事前調整が望まれる。

スウェーデン滞在中の経験や各研修先での学びについては学生の報告書に譲るが、どの研修先でも活発な質疑応答が行われ、学生の理解が深まった様子が見られた。現地での対面交流だからこそ、深い学びや一歩踏み込んだ経験が可能であることを改めて感じた。個人的には、ヴァッテンユーレット幼稚園での教育体制と体験型学習プログラムが特に印象的であった。園児が屋内外での活動を通じて自発的に考え、行動することに重きを置いており、自然の丘や林をそのまま取り込んだ園庭の設計がその教育方針を象徴していた。社会の発展を担う人材育成のために惜しみない教育体制と設備が幼稚園の段階から実装されており、日本の教育制度にも多くの示唆を与えるものであった。語学を専門とする立場から特に興味深かったのは、講習中に知識の広がりを表す比喻として「ショウガの根のように (som ingefärsrötter)」という表現が使われていた点だった。園長に尋ねたところ、スウェーデンで一般的に用いられている表現ではないとのことだったが、日本語の「芋づる式」と共通する発想を感じた。スウェーデン語には、定着を意味する「根を下ろす (slå rot)」やアイデアを出すことや新しく何かを始める際に用いる「芽を出させる (få något att gro)」といった植物を用いた表現が一般的にあり、日本とスウェーデンの文化や言語に直接的な相互関係がない中で、こうした共時的な比喻表現が存在する点には大いに興味を惹かれた。

今回の海外研修ではプログラム管理の仕組みとして、研修期間中の一日の締めくくりに Google フォームを活用した点呼を実施した。この点呼では、その日の研修内容に対する率直な感想や自由行動の報告を一言コメントとして収集した。この試みを通じて、渡航先での学生一人ひとりの学びや考えに触れることができ、有意義な取り組みだったと感じている。

このように、2024 年度の海外研修では事前学習やプログラム運営、現地での活動を通じて多くの課

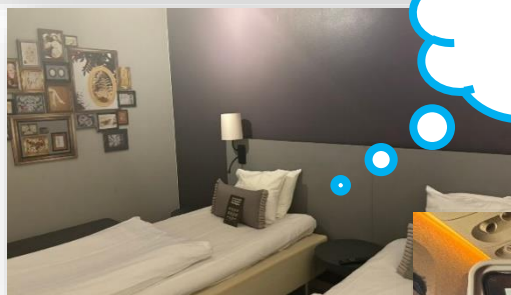
題と収穫があった。今後も現代福祉学部の特徴ある教育活動として、海外研修がより充実し、発展することを期待する。

スウェーデン研修思い出

8月31日-9月1日



スウェーデンに
到着！



9月2日-3日



可愛い
横断歩道

コミュン!



フレスクール



ロイヤルシーポート



小児病棟

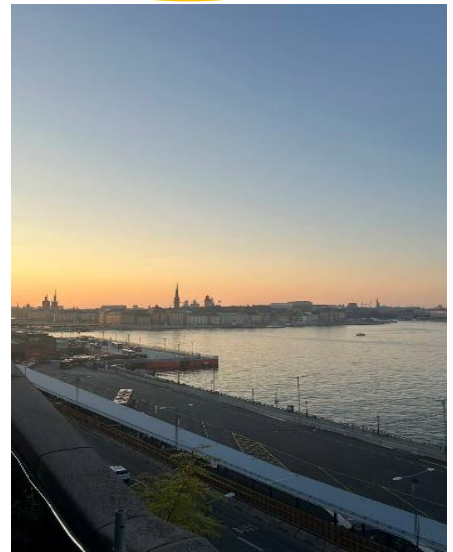
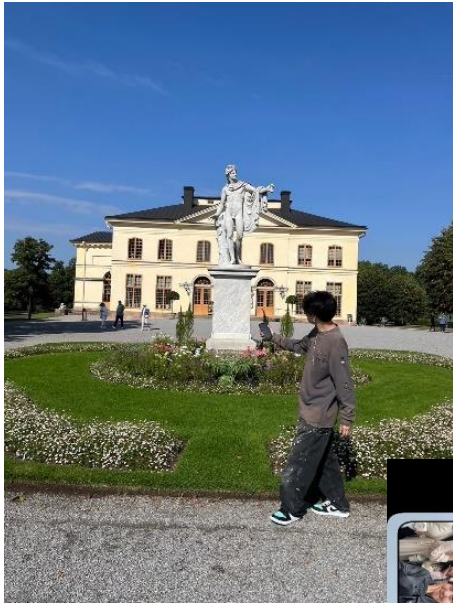


ストックホルム大学の
学生との交流❤️



9月4日-5日

自由研修日



小学校訪問

高校の特別支援学級訪問



9月6日-7日



お昼ご飯



機内食美味しかったです！



FIKA TIME!



END